
小田和良の花婿修行！

熊田明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小田和良の花婿修行！

【Nコード】

N5134T

【作者名】

熊田明希

【あらすじ】

大学受験に失敗した小田和良の家に押しかけてきたのは幼馴染みの横葉真理奈だった。「息子さんを私に下さい！」

母親の提案により小田和良は一年間横葉家に住み込みで花婿修行を積むことになるが――！？

主人公の小田和良が花婿修行として芸道を学ぶお話ですが、基本的に読んでいの方にも分かりやすく説明するために小田和良は出てくる芸道について何も知りません。実は作者がこれを書き始めた時

点でも分からないことがたくさんあります。それでも分かりやすく
ていねいに、かつ明るい話を書くことを心がけるので、皆様、ご一
読をよろしくお願いします。

登場人物

おだかすよし
小田和良・・・家事はできるが彼女はできない典型草食系男子。あだ名はカズ。コンタクトレンズは痛そうで恐いので眼鏡を愛用している。

よこはまりな
横葉真理奈・・・横葉家の長女。文武両道で大らかな人間だが我が強いために常識外の行動に出ることも。あだ名はマリちゃん。普段は標準語だがたまに地の大阪弁が出てしまう。

かものみや
鴨野美弥・・・横葉芸能専門女学院の一年生。高校で吹奏楽部に所属していた経験から琴に興味を持つ。あだ名はミィ。生来の妹気質で甘え上手だが、猫のように気まぐれ。

ちがさき
茅賀咲・・・横葉芸能専門女学院の二年生。中学生から始めた弓道を専攻している。あだ名はさっちい。本当は年長だが外見から小学生に見られてしまうことに密かにコンプレックスを抱いている。

ふじさわ
不二紗和・・・横葉芸能専門女学院の二年生。家が京都の茶道の表千家だが、裏千家も学ぶために入学してきた。あだ名はサワさんともサワちゃんとも。年下の面倒見が良い。

かわさきだいし
川崎大志・・・横葉芸能専門女学院の一年生。書家を目指してこの専門学校の門を叩いたがある勘違いをしていた。あだ名はタイシ。何事にも強気な性格だがそれ故にうっかりが多い。

その他・・・エキストラの皆様。

息子さんを私に下さい！

進学校を卒業した三月の記憶もまだ新しい四月。

小田家の二階にある和良の部屋で、母親のかほりが眉を顰めて通知を眺めている。

通知の冒頭は桜散るの名文で飾られていた。

「むむむむむ………」

窓の外を見れば桜は今は咲き頃で、今週末がピークを迎えるとニュースキャスターは言っていた。なぜ自分の息子だけこんなにも早く桜が散ったのか。

悩ましい頭を抱えながら部屋から出て階段を降りる。グラタンの甘いミルクの匂いに釣られて居間からキッチンに向かうと、青いエプロンをした小田和良がサラダボールにレタスやルッコラ、春雨を入れてそれにサラダドレッシングを絡めていた。横には最後に飾りとして置くのだろう三つ葉が用意されている。

和良はかほりに気付くと眼鏡を右の二の腕で掛け直して柔らかく笑った。

「もうすぐ晩ご飯の支度ができるから箸を用意してくれる？」

「はい」

かほりは和良に頼まれて食器棚の箸差しから和良と夫と自分の分の箸を抜くと、軽快な足取りでテーブルに向かい箸を並べた。

更にいつも通り茶碗も抜かりなく準備すると、大人しく居間に座ってテレビを点ける。

ちょうど時刻は六時を回ったところで、夕方のニュース番組では地元の高校の入学式の模様が放送されていた。

初々しい高校生が一人一人名前を呼ばれて起立する姿は、懐古心と呼び起こして息子の和良の時もこうだったなあ、と感慨に耽る。

「お待たせ。サラダとビシソワーズは冷やしてるからいつでも大丈夫だけど、グラタンはあとオーブンの中で焼いて少し焦げ目を付け

る必要があるからお父さんが仕事から帰ってきたらみんなで食べよう」

「うん、分かった。いつもありがとね、和良」

「もう日課みたいなものだから」

笑って答える和良にかほりは心底感謝しながらも、脳裏には先ほどの入学式の様子が離れない。

かほりは姿勢を正すと、真向かいを指差して和良を見つめる。

「ちょっとね、お母さん話があるから座って」

和良は小首を傾げて「何だろう……」と小さく呟きながら正面に正座で座る。

かほりは息子の顔を見つめながら頭の中を整理すると、おもむろに口を開いた。

「お母さんね、和良は料理もしてくれるし洗濯もしてくれるし日曜大工だってしてくれるからすっごく助かってる。助かってるんだけどね、さすがに大学受験に落ちても何気なく主夫をやってちゃ、いけないと思うの」

毎日朝も夜も家事で忙しかったから昼の勉強に身が入らなかったのではないか。

かほりはそんなことを思いながらある重大な決意をした。

「だからね。和良はこれから一年間しっかりと勉強に専念して、代わりに家事はお母さんが」

「やらないでくださいお願いします」

即答で和良が土下座をすると、かほりもそこまで強気で家事をやるとは言えない。

弁護士として普段は仕事でとても忙しく、家事をやっている時間が無いのも事実ではあったが、それ以上に小田家には暗黙の了解があった——かほりが家事をすると家が崩壊する。

料理をすればなぜか新進気鋭の印象派の画伯が描いたようなぐちゃぐちゃのよく分からない食べ物が出てきて、挙げ句それを食す者は翌日トイレから出ることができなくなる。

洗濯をすればどんな服も真っ白になるが、プリントされている絵柄や刺繍によるレースなどがなぜ綺麗さっぱり消えてしまうのかまだ説明はされず、小田家の七不思議の一つに入っている。

掃除など建て前でしかなく、掃除という名の戦争の現場を不幸にも目撃してしまった夫の遼は、後日息子に悲しい戦争体験として『電灯は揺れ、壁には燐が入っていた。ぼわー、ぼわーっとコンロが炎上して、あー、もうお父さんこれまでだなんて……』と語って聞かせた。

そんな悲しい歴史を顧みて決められた暗黙の了解を、かほり自身も自覚していた。

それでも和良の未来の為を思ってかほりが食い下がろうと口を開いた時だった。玄関のインターホンが鳴った。

回覧板かしら、と思いながらかほりが玄関に出てドアを開けるとスーツ姿に伊達眼鏡をかけて、後ろにメイドを侍らせた女の子が立っていた。

エクステされた茶髪や薄い化粧で一瞬かほりには誰なのか分からなかったが、首にかけている貝殻のペンダントを見て判然とする。

「あら、もしかして真理奈ちゃん？」

かほりが息子の幼馴染みの名を口にする、と、真理奈と呼ばれた女の子が斜め四十五度に腰を曲げてお辞儀をする。

「ご無沙汰しておりますお母様」

「そんな改まらなくともいいのに」。それに高校では生徒会長を務めて忙しかったんでしょ？ 和良から話は聞いているわ」

かほりの言葉に頬を赤らめた真理奈が、いえ、と首を振る。

「浅学ながら学校の良き指導者として生徒の規範となれるよう努力はしましたが、至らぬ点多く己の未熟を思いました。ですが、同時にとても貴重な体験もできて私は一段と成長することができたと思っています」

頬には笑窪を作り自信に満ちた表情を覗かせる。

かほりは真面目な真理奈の気質に好感を持っていた。二年ぶりに

会って更に女らしく綺麗に育ちながらも、その生来の気質が衰えるところかなお一層の磨きがかかっていることに頼もしさを感じる。

（こんな子が和良のお嫁さんだったら――）

何事にも消極的な和良をぐいぐいと引っ張ってくれる姉さん女房の役割を果たしてくれるだろう。そんな想像をしながらも、まさかと自分でそれを否定する。いくらなんでもこれほどの娘にうちの息子では不釣り合いだろうと思い改める。

勝手な想像を振り払うと、かほりは来訪の理由を尋ねることにした。

「……それで、今日はどうしたの？」

真理奈はそれを聞くと素早く玄関に正座をしてくる。その余りの早業にかほりが啞然としていると、

「息子さんを私に下さい！」

近所にも聞こえんばかりに大きい声で言う真理奈に、かほりは目を白黒させて驚いている。家の中ではがしゃんと皿が落ちて割れる音がした。恐らく珍しいことに和良が落としてしまったのだろうが、さすがに今回ばかりはそれも納得だった。いきなりこんなことを言われたら誰だって驚くだろう。

真理奈は頭を上げると真摯な瞳でかほりを見つめる。

かほりは混乱する頭で状況を整理しようとするが訳が分からない。そもそも婚約とは民法にその規定がなく判例によれば使用賃貸契約と異なり諾成契約なので口約束でも法的拘束力が生じることを認めているがかといって双方に婚姻の意思があるかどうかが一番の問題であり――

「そうよ！ 婚姻における要件は当事者双方に婚姻の意思があるかどうかだけ！！ 真理奈ちゃん、もし息子がほしいなら息子を説得すればいいわけで私に言うのは意思の錯誤で契約無効よ！」

「確かに！」

衝撃を隠せない様子で目を見張る真理奈を見て、勝ったな、とかほりは口元に笑みを浮かべる。主に心理的な威厳が何かで。

痛恨の失態にほぞを噛む真理奈は、すっと立ち上がる。

「ではお言葉通りに息子さんを説得するためお邪魔させて頂きます」靴を脱いで玄関を上がろうとする真理奈をかほりが立ち塞がって邪魔をする。

真理奈はそれを胡乱な目で見たが、すぐに脇を通り抜けようとして再びかほりの妨害を受ける。

バスケットボール選手のように腰を屈めた真理奈は、フェイクを上手く入れて右と見せかけ左を抜けようとするが、両手を大きく横に広げたかほりが懸命に妨害工作をしてくる。

「お母様、どういいうおつもりですか!？」

「婚姻のために和良を説得する前にまず、和良に会うために真理奈ちゃんが我が家に入ることを私に納得させてみなさい！」

胸を張って威張るかほりに、真理奈は一歩たじろぐ。だが、その肩を後ろに侍っていたメイドが支えた。

「お言葉ですがマダム。あなたは一人の女性と一人の男性との会話を妨害しています。その妨害行為は国民の幸福追求権を著しく阻害しかつ、あなたのその行為は権利の濫用に当たらないのですか？」

「私は良心の自由からこんな夜遅い時間に女の子が男の家に入りこむのは良くないと思うわ。また日を改めてお昼にでも出直してきなさい」

「夜六時二十二分五十二秒を早いか遅いかで鑑みると、日本の一般的な職業である会社員の統計学上の帰宅時間は夜の七時から十時が全体の三分の一を占めていて最も多いはず。ここから推察するに六時二十二分——失礼、今は二十四分ですね——は日本人の三分の一の人間から見てもまだ就業時間である可能性が高く、よってこの時間を夜遅いと表現するのは些か誇張に思われます」

メイドの指摘にかほりはにっこりと慈母の如き笑顔を向ける。

「学生はもう学校が終わってる時間よ？」

空気が凍った。最初からかほりはメイドと真正面から戦う意思などなく、単純に最初の意地で何としても相手を言い包めただけだった。要するに、最初に障害として立ち塞がった手前、本心では中に入れても構わないが負けを認めるのが嫌なだけだった。まったく子供である。

それでもメイドは必死に反駁を試みる。

「ですが——」

「いや、もういいんだ、レイカ。私は自分の非を認め、また後日改めよう」

「真理奈様！」

よろりと後退する真理奈の肩をメイドはしっかりと支えるが、その主人は既に気を失い蒼白な顔をしていた。

熾烈な戦いの末に勝利を収めたかほりはちっぽけな自尊心が満たされ、悠々と屋内に凱旋をしようとして、居間のドアから冷めた目でこちらを見つめている和良の姿を認めた。

「えっと……話済んだ？ さっきお父さんからメールがあつて遅くなるそうだから、先に食べててくれて。二人ももし晩ご飯まだなら入って食べていっただうかな？」

「カズくんがそう言うのなら私は喜んでお邪魔させてもらおう！」

和良の申し出に嬉々として真理奈とそのメイドであるレイカが玄関へと入ってくる。

健闘虚しく二人の来訪を許してしまったかほりは玄関に座りこむと灰色に燃え尽きてしまった。

その姿に哀れを感じたのか、レイカがかほりに手を差し伸べた。

「ナイスファイトでしたよ……、お・ば・さ・ま？」

「まだぴっちぴちの四十三じゃっーい！」

ビシソワーズとサラダは元々多めに用意していたこともあって四

人分用意することができたが、グラタンはそうもいかず、客人だからと遠慮した真理奈とレイカが二人で一つを半分ずつ頂くことになった。

四人で頂きますと唱和してからめいめいが箸やスプーンを取って食事を始める。

最初にスプーンでビシソワーズを口に含んだレイカが微笑しながら目を細める。

「とてもなめらかでしつかりとじやがいもが溶け込んでいます。基本的に忠実な、ですがとても優しい味です」

「えっと、ありがとう……？」

褒められているのかいまいちよく分からず礼をすると、レイカは小さく返礼をした。

普段は両親と自分しか食べないからかこうして味の品評をされるということがなく、何とも不思議な気分だった。

一方のかほりは平素と変わりなく黙々と食べている。

そんないつもの光景に和良が安心すると、和良の向かい側に座っている真理奈が笑いながらこちらを見ていた。

「どうしたの？」

気になって和良が尋ねると、真理奈が持っていた箸を一旦テーブルに置いて姿勢を正す。

食事の前に伊達眼鏡は外してレイカに預けてあり、整った顔立ちを和良へと向けて真剣な表情で口を開く。

「カズくん。私のために毎朝味噌汁を作ってくれないか？」

「あ、ごめん。マリちゃんはスープより味噌汁派だったよね？」

笑いながら謝る和良を三人は見ながら、鈍すぎだろうと心の中でツツコミを入れる。

本人はどうやら真剣らしく、確か味噌を使って作るビシソワーズもあるよ、とまったく関係ない話を始める始末だった。

本格的に息子の将来を危惧したかほりはスプーンを皿の縁に置くと、体を傾けて真理奈の方へと向き直る。

「さっきの話だけだね。一年、和良が花婿修行をして互いに婚姻の意思がある時は、二人が婚姻届を提出するのはどうかしら？」

突然のかほりの提案に和良は驚くが、それを聞いた真理奈はかほりに向き直って土下座した。

「お母様、私たちの関係をお許しいただきありがとうございます！」
「えっと、あの、何の話を――？」

戸惑う和良の横で、メイドがおもむろに立ち上がった。居間から出て行くと、すぐに巨大なスーツケースを持って戻ってきた。

和良とかほりは何なんだろうかと訝しい目でそのスーツケースを見ていたが、真理奈が目で合図するとレイカはスーツケースを開けた。中には福沢諭吉が印刷された紙幣が大量に詰め込まれていた。

その余りの額に二人は目をぱちくりさせる。

真理奈がにっこりと笑った。

「支度金の五百万円です。正式に結婚が決まったわけではありませんが、とにかく心ばかり用意させていただきました」

かほりはそれを見てスーツケースを押し返すと、真理奈に笑い返す。

「要りません。うちはお金には困ってません」

「ですが、家事には困りますよね。優秀なメイドはどうですか？」

「――だから、……？」

しつこく食い下がる真理奈にかほりは呆れながらも断ろうとしたが、それより早くレイカがかほりの前に出る。

レイカはぺこりと頭を下げると、メイド服の裾を抓んで上品にお辞儀をする。

「このレイカは横葉家が雇っているメイドの中で最も優秀なメイドで、家事は勿論、日本語、英語、ラテン語、中国語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、アラビア語と十ヶ国語を修得している上に数々の国家資格、加えて各種運転免許と調理師免許、船舶免許、危険物取扱者免状まで取得しています。そして何より、現代人に嬉しい機能としてマッサージ師免許を持ってい

ます！」

「よし、よろしくねレイカちゃん！」

「——ええっ!？」

あっさりと承諾した母親に和良は頭が痛くなりながらも、ずれた眼鏡を掛け直して真理奈を見る。

「えーっとさ、本当にぼくと結婚することになるんだよ？ マリちゃんには嫌じゃないの？」

「何を言う？ むしろそれは私の望むところだよ」

はっはっはっ、と大らかに笑う真理奈にそれ以上は無駄だと察した和良は、仕方なく先ほどの話に乗って花婿修行をすることにした。昔とまったく変わっていない真理奈のことだから最後には意地でも我を通すと、和良は実体験を通じて分かっていた。

「それで——ぼくは具体的に何をすればいいの？」

「横葉家で一年間同居をしよう！ それでもしカズくんが私に気に入らないところがあったら婚約は破棄ということだ」

「どうだろうか？」

真理奈の申し出に今さら否やは無かった。

和良はそれに同意をすると明日からの転居を確約して、その日は二人に一旦引き取ってもらった。

BMWに乗って到着した先は、大豪邸だった。

白い塀の上には有刺鉄線による鉄条網が張り巡らされ、犬を連れた青い制服の正義の味方が散歩しているなど、厳戒な警備体制が取られている。

鉄格子の門を抜けた先には噴水付きの広大な庭があり、その舗装された道を車は進む。

あまりの豪邸に和良は車の窓から外を眺めてただただ驚くしかない。

「マリちゃんの家って初めて来たけど、すごいおっきいね」

「ああ、地図無しでは丸一日迷うかもしれない」

笑えない冗談に和良が蒼褪めていると、真理奈が正面を指差した。
「あそこが本家手前の別館だ。あそこにこれから二人で住むことになる」

どれどれと和良が見れば、そこには高校の校舎ほどもある巨大な洋館が建っていた。

外見は普通のコンクリート住宅だが、窓辺に出窓や一階にバルコリーなどが付いており、脇には体育館のようなものまで建っている。
「二人で暮らすんだよね？」

「そうだが……もしや不満があるのか？ 言ってくれば至急手配するが」

「不満じゃなくて、むしろその逆で大きすぎるんじゃないかな、と」
「む、そうか。では代案としてだな、横葉財閥が運営している寮に入るのはどうだろう？」

寮ならばこれほど大きくは無いだろうし、何よりそこには少なからず他にも何人が住んでいる人がいるだろう。

そう思った和良が頷くと、真理奈は運転手の爺やに目的の変更を指示した。

爺やは畏まって車の進路を変えると、行く手に大きな高層ビルが見えた。

本当にここは私人所有の土地なのだろうかと和良は疑問を隠せない。ビルに近づくにつれ、周りには服飾店やコンビニまでもがあるのが見えた。

「ねえマリちゃん。ここってマリちゃんの家だよね？ 普通にお店があるんだけど？」

「あれは横葉財閥が法人として営業している専門学校に通う生徒のために営業許可を発行した正式な支店だ」

「あ、もしかしてさっき言ってた寮ってその？」

合点がいった和良が言うと、真理奈がそれを首肯した。

そんなこんなで車は専門学校を通過し、その奥にある十五階建てのマンションの前で止まる。

マンションの横には立体駐車場まであり、広いその面積に贅沢にも二台だけしか停められていなかった。

車は二人を降ろすと立体駐車場の方へと進んでいくが、本来なら二百台は収まるはずのスペースに車が三台しかない光景はどこか寂しかった。

和良は真理奈に続いてマンションのフロントに入ると、受付にいた女性が頭を下げて礼をしてくれるので慌てて返礼する。

「新しい入居者の小田和良と横葉真理奈だ。相部屋で構わないから一部屋貸してもらえるかな？」

「真理奈お嬢様の為でしたら至急十五階をすべて空き室でご用意いたします」

「いや、新婚生活にはご近所付き合っても重要だと聞く。構わないからそのまま空いている部屋を貸してくれ」

「はい、畏まりました」

二人のやりとりを傍から見ていた和良は黙ってロビーで待っていたが、後から中に入ってきた女の子のために道を開けた。

「あ、ありがとね、おにいちゃん！——って、あれ？ 男の人？」

金色のツインテールを揺らしながら釈然としない表情で女の子は和良を見上げてくるが、和良は何がおかしいのかまったく分からない。

女の子はじろじろと和良を見て回っていたが、やがてくんくんと和良の体を嗅ぎだした。

「わ、何を？」

「おにいちゃんじゃなくて実は男装のおねえなのかなって思ったけどそんなことはなかったのだー！」

「ばーん、と口で効果音を足してから言う女の子に和良は苦笑を

禁じ得ない。

独特な愛嬌のある女の子で話しやすそうだから、先ほどのことを尋ねることにしてみた。

「ぼくは男だけど、ここに男がいたら変なのかな？」

女の子は八重歯を覗かせてにこつと笑う。

「うん、すつごく変だよ。だってここは横葉芸能専門女学院に通う生徒に与えられてる寮だから」

「横葉芸能専門女学院？」

首を傾げる和良に女の子は驚きの表情で和良を見返す。

信じられないと言わんばかりだった。

「横葉財閥が運営している芸能の専門学校を知らないの？　ぬぬぬ、解せぬ——というわけでミイが特別におにちゃんに解説してあげる！」

「ご丁寧にありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる和良に、「いえいえー」と女の子が手を振る。「横葉芸能専門女学院は日本の伝統を護るために芸能諸般を教育し技術を受け継がせてゆくことを目的とした横葉財閥の法人学校でありながら国によって正式に認められた教育機関でもあるということにかくスゴイ学校らしいのだあ！　ただし女に限る」

早口で捲し立てる女の子の説明を聞いて、ようやく納得がいった。先ほどの高層ビルがそれであり、あそこに通う生徒は女学院なので当然の如く女性である。そしてその生徒に与えられている寮には女子生徒が住んでいる。そこへ男の自分がいるのは甚だ変だ。

すべてを理解して、和良はやっぱりにここに住むのは止めようと思い真理奈に言おうと振り返るが、ちょうど受付の女性が真理奈から受け取った契約書類を受理したところだった。

「これで今日からカズくんと同棲が始まるな」

和良の正面まで戻ってきた真理奈が満面に笑みを浮かべて言うが、和良は笑えない。

代わって今度は隣に立つ女の子が受付にポケットから出した書類

を提出する。

「今年入学の音楽科専攻の鴨野美弥です。家の都合で寮生活を希望したんですが、手続きに不備があって足りない書類を持ってきました」

女性は女の子から書類を受け取って確認するが、申し訳無さそうに眉根を寄せて頭を下げる。

「——えっとね、この書類だと申請期間がもう過ぎていて部屋の貸し出しは……」

「え………」

表情を固めて立ち尽くす女の子に、和良は可哀想な気持ちになって受付のところまで歩いて行く。

受付の女性は和良に気が付くと、不思議そうに視線を向ける。

「あの、マリちゃん——真理奈さんとぼくの部屋をこの子に譲ることってできませんか？　ぼくたちは別のところに住むので」

最初に紹介されたあの学校みたいな大きい邸に住めばいい。そう思っただけで進言してみたが、突然後ろから真理奈が抱き付いてきた。

「相も変わらずごつつ優しゅうて、うち、カズくんのそういうところ好きやねん！」

柔らかい感触が背中当たり、和良は顔が熱くなりながらその手を振り解く。

つれへんわー、と唇を尖らせる真理奈に和良はときどきしながらも諫めることにした。

「マリちゃん、また地が出てるよ」

「え、ホンマや！？　——んっ、こほん。とにかく、私からも受付の君にお願いしたいんだが、いいかな？」

「あ、いえ、真理奈お嬢様からの要請とあらば特別に部屋をご用意させていただくので心配はなさらないでください」

慌てて電話をかけて何事かを忙しく手続きし始めた受付の女性を見ながら、和良はこれで一安心だと肩を下ろした。

受付の前にいた女の子が、そんな和良と真理奈の前に歩み寄って

頭を下げる。

「あの、本当にありがとうございます！ お陰ですごく助かりました」
ひまわりのように明るい笑みを浮かべて言う女の子に、和良は頭を下げた。

「あ、いや、最初に色々教えてもらってお世話になったのはこっちだし、だからお相手だよ」

笑って言う和良に女の子は驚きながらもくすりと笑った。

「おにいちゃんってとってもいい人だね。ミイ、惚れちゃった」

それを聞いた真理奈が反射的に和良を抱きしめ二人を引き離すと、鋭い目を女の子へと向ける。

「ははは、惚れるのは勝手だが泥棒猫はよくないぞ？」

「ミイは猫じゃないもん！ それにい、おにいちゃんにだって恋愛の自由はあるよ、ねー？」

「うん、まあ……」

曖昧にお茶を濁しながら隣の真理奈を窺うと、ふるふると唇が震えていた。

まずい。

直感的に和良は真理奈を宥めようとしたが、遅かった。真理奈が大粒の涙を流す。

「えーん、ややー！ カズくんはうちのじゃなきゃ、いややあー！」

泣き喚く真理奈に啞然とする女の子を見ながら、前途多難な四月に、和良は気が重くなる一方だった。

（その後）

泣き喚く真理奈の背中をさすったり頭を撫でたりなどして落ち着かせた和良は、白い目を向けてくる受付の女性からカードキーを受け取って新居の部屋へと向かっていた。

エレベータを出て十五階に着くと、六部屋ある内の一番奥、15-Fというプレートが掛けられている部屋へと進んでゆく。

ドアの前まで来るとちょうどエレベータがまた上がってきて、和良が音に振り返ると先ほどの女の子が出てきた。真理奈が反射的に邪魔するように間に立つ。

和良は苦笑しながらも女の子を見る。

「あれ、君もこの階なんだ？」

「うん、15-Dだよ。おにいちちゃん」

明るく笑う女の子に癒されながら、和良は真理奈の横に進み出て手を差し伸べて握手を求める。女の子がそれに応じて手を握る。

真理奈はわなわなと震えていたが、懸命に自己を押し殺して堪えているようだった。口元は笑っているが、目はまったく笑っていない。

「ぼくは小田和良。和良が長かったらカズでいいよ」

「ミイは鴨野美弥だよ。ミイって呼んでね、カズおにいちちゃん」

「うちもカズおにいちちゃんって呼ぶんやあー！」

「えっ!？」

対抗心を燃やして叫ぶ真理奈を宥めるのに更に十五分の時を要したのはまた別の話である。

はい、チーズ

部屋の間取りは2LDKでどちらも洋室。狭くはなく、むしろ四大家族が快適に住めるだろうという広さを確保していた。

家具類は冷蔵庫やエアコン、テーブル、食器棚、靴箱、洗濯機、ベッド、ソファなど生活に必要なものはほとんど用意されていたが、筆筒とテレビだけは各自負担だった。

筆筒は嫁入り道具だから一生使えるものを自分で探してほしいという学校側の要らぬ配慮からであり、テレビはNHKの集金回避のためだった。和良は後者は少しセコいのではないかと、真理奈の説明を聞いて内心では思ったが、それを言うのは憚られた。

「まず今日は外に必要なものの買い出しに行こう。筆筒とテレビと食器と、あとは食料品も買わないといけないな」

手帳に必要なものを筆記した真理奈がそれを閉じながら言うと、部屋を見て回っていた和良がそれに頷く。

「あとゴミ箱や洗面用具の細々としたものも必要だね。雨が降った時のために傘も買わないと」

文字通り身一つで転居してしまっただが、少し物を買えば今日からでも普通に生活はできそうだった。

ダンボールに詰めて送った衣服も爺やに手配して最初の豪邸からこちらに運ばれているらしく、もうすぐ届く予定だった。

ピンポン、とチャイムが鳴り、誰かの来訪を告げる。

「爺やさんかな？」

「少し早い気がするが、爺やなら迅速な行動が期待できるな」

二人が玄関に行つてドアを開けると、正面には美弥がキャミソールにスカートという外出用の姿で着飾つて立っていた。

刹那、真理奈がドアを閉めて鍵をかける。

「なんだ、誰もいなかったな」

「——って、今おもいつきりミイちゃんがいたよ!？」

真理奈のあからさまな笑顔にツツコミを入れてから和良はドアを再び開ける。

玄関にはやはり美弥が同じ姿勢のまま立っていた。その顔には困惑の色が強く出ている。

真理奈は臍を曲げながら眉を寄せて美弥を横目で見る。まるで嫁をいびる姑だ。

「何か用かな？」

「マリちゃん、失礼だよ。——ごめんね、ミイちゃん。それで何かな？」

「ミイね、もし良ければカズおにちゃんと買い物に行きたいなあって……ダメ？」

美弥は両手を組んで甘えた声で懇願してくる。

ちょうど自分たちも家財や日用品を買いに行こうと考えていたところなので一緒にしようかと、和良は頷いた。

「ぼくたちも買い物に行こうと考えていたし、じゃあみんなで行こう。二人ともそれでいいよね？」

和良が良かれと思い提案すると、美弥は複雑な心境で躊躇いがちに頷く。

一番この事態が面白くないのは真理奈だった。

本当ならば同棲という事実婚の形態に基づいて夫婦同然の蜜月を過ごす計画を昨晚懸命に考えてあらゆる準備をしていたにも関わらず、最初の一日目にしてさっそくその邪魔者が現れたからである。

昨夜立てた計画通りならば今頃は一緒に食料品の買い物をするがらさりげなく腕を組むはずだった。しかし美弥がいては確実にそれを妨害されるだろう。

ずいっと体を前に出した真理奈は、美弥の正面に仁王立ちしてその小さい体を見つめ、不意に思い止まる。

（うちと和良の二人じゃと夫婦やけど、間にこん子挟んだら家族に見えるんちゃう……？）

小さい女の子を挟んで仲睦まじく笑い合う自分と和良の図を妄想

し、胸が高鳴る。それは実に、良い。

「えへ、えへへへ……」

奇妙に笑いだした真理奈に二人は恐れて身を引くが、きつ、と目付きを鋭くした真理奈がそんな二人に笑いかける。

「隣人の誘いを断るのも失礼だからね。私に異存は無いよ」

和良は真理奈の同意を見て半ば安心し、玄関脇の壁に貼ってあるカードフォルダーからカードキーを抜き取り、靴を履いて外に出る。続いて真理奈も出てドアを閉めると、三人で連れ立ってエレベータへ向かう。

真理奈が和良と手を繋ごうと腕を伸ばすと、その間に後ろから美弥が割って入る。

「カズおにいちゃん、手繋ごう？」

「うん、いいよ」

和良が美弥の伸ばした手を繋ぎ歩く。美弥は無邪気に笑うと、上機嫌でスキップするように歩く。

それを眺めていた真理奈は頬をリスのように膨らませると、黙ってその後に続いた。

エレベータから降りてマンションを出ると、なぜかマンション入り口の地面に横たわっている小学生ほどの女の子がいた。

ボブカットの女の子は三人を見ると、ぺこりと頭だけを動かして挨拶をしてくる。

三人もそれに応じて頭を下げるが、なぜ地面に寝ているんだろうという疑問は残る。

真理奈は女の子の横まで歩くと、その肩を抱いて助け起こす。

「君、具合でも悪いのかい？」

救急車を呼ぶべきだろうかと頭の片隅で考える。

もし何か重大な病で女の子が倒れていたならば早急に手を打つべきだろう。

だが、意に反して女の子は顔色一つ変えずに首を振った。
「貧血」

一言だけそう言った女の子に三人はほっと安堵しながらも、そのまま見捨てるわけにもいかない。

真理奈が軽々と女の子をおんぶすると、女の子は驚いて「わ」ただけ無感動に発した。

「君、お姉さんにでも会いに来たの？」

和良が目線を女の子に合わせて尋ねるが、女の子は黙ったままちよんちよんと正面を指差す。

三人がその方向を見ると、日産のミニバンがマンションの前まで走ってきた。

女の子を背負った真理奈の前で止まると、運転席から清楚な黒髪が和服に似合う女性が出てきた。

三人は一樣にこの女の子のお母さんだろうかと思っただが、それにしては若い。まだ二十代も前半にしか見えないこの女性が母親であるはずがないだろう。

女の子の姉だろうかと思星をつけて真理奈がその前へ進み出る。

「あの、この子は妹さんでしょうか？ 先ほど地面に倒れていました……」

「ありゃあ。さっちいったら、あかんくなったら中に入っとってゆたつしやるあ？」

案じるように心配そうな顔で女性が言うと、女の子は首を振った。

「戻ろうとしたら倒れた」

「ほんなら、しょうがおへんなあ」

独特のゆっくりとした言葉遣いとぼーとした表情からか、和良と美弥はどうにももどかしい気分になる。

それをあまり気にしない真理奈は女の子を背中から下ろすと、どこか見覚えのある女性を見ながら、はてと首を傾げる。

「うち、もしかしてアンタと会ったことあるんちゃう？」

「ん〜？ あてはそない記憶ありやしまへんけど、もしあてが忘れ

てはるんだけやったら堪忍どすえ」

「そやったかな……あ、確かサワちゃんやったよね？ お互い十年以上前で忘れとったんやけど、ほら、うちが大阪の実家いるときに茶道のセンセに付いて来いひったんがサワちゃんやったる！」

パンツ！ と、左手を右手の拳の底で叩いて言う真理奈に、紗和と呼ばれた女性も口の前で両手を叩いて朗らかな笑みを浮かべる。

「せやなあ！ あてもあんたはんのこと思い出しました。いやあ、えらいべっぴんさんになったどすなあ！！」

「アンタもやんかあ。うち、すぐは分からへんかったもん」

女子二人が意気投合して思い出話に耽るが、それを和服の裾を引くことによって止めたのは女の子だった。

紗和と呼ばれた女性は女の子に向き直ると、「えろう待たせて堪忍どす」と謝る。

女の子は頭を振ると、停めてあるミニバンの助手席に自ら入る。

紗和が三人に振り返った。

「あてらこれからちよっとそこまで行きはるんやけど、一緒にどうどす？」

「ええの？」

「かましまへん」

につこりと笑った紗和に甘えて、三人はミニバンの後ろに乗ることにした。

最初に真理奈が運転席側に座り、間に和良が入って最後に美弥が入る。

助手席に乗っている女の子と紗和がシートベルトを締めて、車は発進した。

ミニバンとはいえ、車内はそこまで広くない。後部座席に座る三人は少し詰めた状態になっていたが、なぜか両サイドが心なしか僅かに隙間が空いていた。

和良はそれを見て狭いのにどうして更に狭まってくるんだろうと謎に思いはしたが、二人とも満足そうな表情を浮かべているのであまり気にしないことにして、ずれた眼鏡をかけ直して運転席の紗和を見た。

「サワさん、でしたよね？ その子は妹さんですか？」

バックミラー越しに視線を一回だけ合わせると、紗和は朗らかに笑う。

「さっちはルームシェアしとりはすルームメイトです。学年もあてと同じ横女の二年生ですえ」

「茅賀咲。さっちい」

短く自己紹介した咲を三人は見遣るが、どうしても小学生くらいにしか見えない。

気を取り直して三人もそれぞれ自己紹介することにした。

「ミイは横女の新生で鴨野美弥だよ！ よろしくね！」

「私は横葉真理奈。今年度から横葉芸能専門女子学院の寮の舎監を任ずることになった。何か寮に不備があれば私が承ろう」

「ええっ！」

車内に美弥と和良の驚きの声が上がった。聞き覚えの無い話である。

しかしこれで和良は腑に落ちることがあった。今朝の寮の受付で女性が真理奈の要請ということで美弥の部屋を特別に用意したのは即ち、この寮の管理人が真理奈だったからだろう。

それにしても前の二人が動揺をまったく出さないどころか、逆に二人の声に驚いている様子を見ると事前に知っていたようである。バックミラー越しに和良の表情を見ていた咲が無表情に口を開いた。

「昨日の夜に寮の掲示板で新しい舎監が横葉財閥の長女であること

が書かれていた」

「あても知ってましたえ」

「サワー、嘘はよくない」

ぼそりと言った咲に「サワーはあきまへん」と、ぴしゃりと紗和が言い放つ。どうやらサワーというあだ名はNGワードのようだ。後ろの三人にはその陰影に一瞬般若が見えたからだ。

柳に風とそれを受け流す咲は体を反らして後ろを向くと、和良のことを指差して「男」と指摘する。どうやら紗和も気になっていたらしく、横目でちらりと和良を見てくる。

「えっと、ぼくは今日からマリちゃんと一年間同棲して花婿修行をすることになった小田和良です」

「「「え?」」」

真理奈以外の三人が表情こそ違えど皆一様に驚く。一人、真理奈だけが泰然と車のソファに深く腰をかけて自慢げに相好を崩している。

理解できないと言わんばかりの前二人と、何か悔しそうに臍を噛む美弥を見ながら、和良はまたもや何か変なのだろうかと慌ててしまう。元々、真理奈は我が強く常識に疎いので本来なら大切なはずのことを言い忘れてるときがある。今朝の、寮が女子寮であることにしてもそうだ。まさか女子寮に男の自分と入るなどと予想できるはずがない。

更に言えば、今さらだが真理奈は横葉財閥の長女だ。所謂、お嬢様なのだ。そんな身分も違う相手が庶民の自分と同棲するというの
は一種のスキヤンダルなのではないかと心配の種は尽きない。

そんな和良の心配を余所に、隣に座る真理奈が重々しく口を開いた。

「ふふん。何か問題でも?」

真理奈の言葉になべて押し黙る三人に、和良は不安が募る。

何か重大なことをまだ言われていないような気がするが、それが何であるか思い出せない。だが、和良の頭の片隅に何か引つ掛かるのは事実だった。

和良が手を挙げて真理奈に直接尋ねようとした時だった。車が止まって目的地への到着を知らせる。

「着きましたえ」

駅前のショッピングモール『VIVA WALK』の駐車場だった。五人が降りてショッピングモールの入り口まで行くと、柱のところにそれぞれの建物に入っている店の名前が書かれており、それが服飾関連なのかレストランなのかなどもしつかりとカテゴライズされていた。

五人がそれぞれ別れて買い物をするか纏まって順番に買いたいコーナーへ足を向けるか話し合った結果、年下の三人の荷物が多くなりそうということで荷物持ちとして年上二人が同行することになった。

店内に入って早速、五人は目の前を通過する『ビバ ポップ』というミニトレインに遭遇した。これはこのショッピングモールだけがやっているサービスで、幼児を乗せたミニサイズの機関車が店内を走って回るのだ。

美弥が興味深そうに携帯電話のカメラ機能で写メを撮るので、真理奈を除いた三人もめいめいが携帯電話で記念に撮影する。

「マリちゃんは撮らないの？」

「む？ それ以前に私は携帯電話を持っていないからな」

あっけらかんと言う真理奈に他の四人が意外な顔をする。横葉財閥の長女なのだから携帯電話の一台や二台、いや、もしかしたらスマートフォンも含めて三台くらい持っているとかばかり思い込んでいたからである。

それを見て取った真理奈が顔を少し赤らめる。

「以前に一回持ったことがあるが、メールが来て内容を見ようとしたらインターネットの画面になったり、通話が来たので折り畳みを

開いてみたが一向に通話が繋がらず着信音が鳴りっぱなしだったり、何だかよく分からなかったので結局使わなかったのだ」

「マリちゃん、それは『使わなかった』んじゃなくて『使えなかった』んだよね？」

微妙な言葉のニュアンスを和良が正すと、真理奈がそっぽを向いて不貞腐れた。

そんな様子におかしさを覚えた紗和が、最後に記念にと四人が集まってビバ ポップを背景に写真を撮ろうと提案した。

「せやったら撮ろうなあ。はい、チーズ」

和良を中心に左に真理奈、右に美弥、そして和良の正面に和良のお臍の辺りまでしか身長がない咲が並んで記念撮影をした。

最後にメールアドレスを四人で交換しあって撮った画像を回してもらうと、紗和は満足したように店の入り口を目指す。それに当然のように他の四人も付き従う。

「いやあ、今日はほんま、楽しかったなあ？」

紗和が朗らかに笑いながら言うのと、うん、と咲が無表情に相槌を打つ。嬉しそうに最後に皆で撮った画像を見ている美弥や真理奈を見つめながら、和良はふと思った。

「あれ？ ぼくたちって買い物に来たんじゃなかったの？」

その一言に四人は束の間、買い物？ と首を傾げるが、すぐに思い出して手を打ったり頷いたりする。

「そうだったな、さすがカズくん。すっかり忘れていたよ」

「カズおにいちゃんが思い出さなきゃ、ビバ ポップで満足して帰っちゃうとこだったね！」

「ほんまやねえ」

咲までもが同意するようにコクコクと頷いている。

このメンバーは本当に大丈夫なんだろうか？

和良は激しく不安に駆られながら、自分が保護者としてちゃんと見張っていないければと強く思った。

最初に家具を見に来た五人は、箆笥を見て回りながらそれぞれを品定めしていくことにした。

まず美弥がオーソドックスな桐の衣装箆笥のところに行く。

「これとかはどうお？」

美弥が尋ねてくるので和良は百四十五センチのそれを隅から隅まで見て唸る。

全体的に無難なそれは八段ほどの収納スペースがあり使い勝手も良さそうだが、引き手がスリットに指を引っ掛けて引くタイプではなく取っ手があつてそれを掴んで引くタイプなのが気になった。

これではもしも服を取ろうとした時に地震が起きたりしたらこの突起に体をぶつけてしまうのではないか。

そしたら痛いだろう。美弥の体はそこまで丈夫そうではなさそうだし、引き手はスリットタイプのものがいいのではないだろうか。

しかし美弥が選んだのはこの桐の箆笥であり、きつとこれくらいのサイズで八段の収納スペースがあることに魅力を感じたのではないだろうか。

真面目に悩む和良の横で、美弥がとてとどこかに向かう。

「あ、ミイ、これにする」

見ると、前面にミストガラスが張られたクローゼットダンスであり、引き手は無論、スリットに指を引っ掛けて引くタイプだ。

（ぼくが悩んだのは一体何だったんだろう？）

甚だ疑問には思うが、美弥が自分にあつたダンスを見つけたことに満面の笑みで祝福を送ることにした。

「うん、ミイちゃんらしくてカワイイと思うよ」

「カズおにいちゃん、ありがとー！」

そんな様子を遠くから見ながら、真理奈だけはそれを微笑ましく思っていた。

「ええなあ……カズくんとうちの子供できたら、カズくんあんなに子煩悩なおとんになってくれそうやわあ」

きやつ、と顔を赤くして恥じ入る真理奈を見ながら、ふうつ、と紗和が嘆息を吐いた。

「女の子が青春してはる姿って見てはってこう——キュンッ、て来
おへん？」

「知らない」

「やーん、さっちはイケズやあ」

なぜか嬉しそうに自分を抱きしめてくる紗和を見ながら咲は、紗和が時々こうして変態になるのを呆れて半ば諦めていた。

犬が発情期に入ってるようなものだろう。大体そういう認識だった。そして真理奈の方を見て、紗和の同類ではないだろうかと案じるが、あちらはどうやら紗和と違い同性に対する変態ではなく異性に対する変態っぽかったのであまり気にしないことにした。

そうして、結局真理奈は実家からタンスを運び入れる手はずを既に整えていたこともあって、美弥のクローゼットと和良の透明な衣装ケースを購入し宅配の手配を済ませると、五人は次のフロアに向かうことにした。

家電コーナーだ。

ここは真理奈と美弥だけでなく、アナログテレビをデジタルテレビに買い換えるつもりで来た咲も加わり、自然、咲のルームメイトである紗和も一緒になってどれがいいか話し合っていた。

「カズくんはアクエスとピエラどっちにしたい？」

「うーん、画質や性能を考えるとピエラかな。あ、ブラピアとかはどう？」

和良が店頭価格で割引されている少し前の型を尋ねると、横にいる咲がそれに頷いた。

「それにする」

何の躊躇もなく選んだ咲に全員が注視すると、咲は不思議そうに首を傾げた。

「何？」

「あんなあ、さっちいって普段から寡黙やから、みなはん積極的な

さっちい見て驚いとりはるんやあ」

「別に、あたしもみんなと一緒にいるのは楽しい」

「ややわあ、かわえー！」

真理奈が黄色い声を上げて咲を抱くと、それに乗じて紗和も「ほんまやあ！」と抱き付いてくる。

咲の中で真理奈が両刀の変態と認識を改めた瞬間だった。そうして変態の順位が真理奈と紗和で入れ替わったが、それを知る者は誰一人としていない。

「ほらマリちゃん、あんまり抱き付いてるとさっちいも迷惑だろうから離れて」

「はい」

和良が嗜めると真理奈と紗和は大人しくそれに従った。本当にこのメンバーでは自分が保護者として面倒を見ないと周りに迷惑をかけかねないと心配に思いながら、今度は自分たちのテレビを選ぶことにした。

美弥も機械には疎いらしく、真理奈と美弥の二人が和良に寄り添う形で店内を練り歩く。

「ミイちゃんみたいに一人暮らし用の小さいテレビがいいならベグザがいいんじゃないかな。ベグザリンク機能とかもあって周辺機器も接続さえしてしまえば操作が楽だし。うちは結局最初のピエラにするけど」

「うん、そーするね！」

そうしてテレビも購入してこちらはミニバンの後ろに載せようということで、一旦店員に大きな箱を持ってもらって五人は車まで行くと、今度は別の棟にある食料品コーナーへと足を向けることにした。

時刻も三時を回り、それなら夜はみんなで誰かの部屋に集まって鍋料理をしようと美弥が言い出した。

「ええなあ。せっかくこうして仲ようになったさかい、そないしよう」
「私も異存はないよ」

「あたしも、それでいい」

他の女子三人も賛同したところで、和良も頷いた。

「それじゃ、今日はみんなで鍋パーティーだね」

おー！ と口を揃えて威勢のいい声があがる。

和良は最初はどうなることかと思いいろんなが、意外とこのメンバーでいることが楽しくなり始めている自分に気が付いて、苦笑した。「む、どうかしたのか？」

振り返って尋ねてくる真理奈に、和良は笑いながら歩き出す。

「楽しいな、って思ってた」

「そうか。それなら私も本望だ」

同じく笑った真理奈と並んで歩く。その前にはV i V A W A L Kの中央に建っている五重塔がある。それを見ながら、和良はふと思った。

まだ全員が入った記念写真が無かった、と。

「ねえ、このポールの上にセルフシャッターでカメラを置いて、五人で撮らない？」

和良の提案に従い四人が五重塔の前に立つ。

和良はポールに携帯電話を置いてピントを合わせると、セルフシャッターにして撮影ボタンを押す。

ピッ、ピッ、ピッ。カシャッ。

五人が揃って撮った写真は、和良だけが背中を向けながらも、頭だけ慌てて後ろに振り返って写っていた。

（その後）

鍋パーティーは、食器を買い忘れてしまった年下三人の部屋では

行えないということで、奇遇にも同じ15階のB号室に部屋を借りている紗和と咲の部屋で行われることになった。

和良と真理奈の部屋と同じく2LDKの大きな部屋なので五人が入っても狭さは感じず、キッチンで紗和が料理をしている間、暇を持て余した美弥と真理奈、それに変なことをしないように見張り役として和良が加わった三人で部屋を物色する。

玄関を入って手前の部屋はわざわざ畳みが持ち込まれており、桐箆筥や、茶道道具が入った棚などが部屋には置かれていた。

「何となくサワさんの部屋だって分かるね」

和良の言葉に二人が頷きながら物色を開始するが、特に目立ったものは見当たらず、次の部屋に移ることにした。

お次はブルーのカーテンや本がたくさん埋まっている書棚、そして部屋の隅には和弓が二本あった。だが、左右で長さが違うことに三人は首を傾げた。

「片方は和弓といって二メートルの正式なもの。短い弓は四半弓といって座りながら射を行うための弓」

いつの間にか後ろに控えていた咲が解説してくれたので、三人がなるほどと納得しながらまじまじと弓を見つめる。

咲はしばらくその様子を見守っていたが、やがて再び口を開いた。

「サワが料理できたからダイニングに集まってと言ってた」

「あ、それなら今すぐ行くよ」

「え、もうちょつと見て……」

美弥が駄々を捏ねるが、和良は問答無用で美弥の手を引いて部屋を後にした。

そして残った咲は、本棚の後ろにひっそりと隠されていた官能小説が動いていないことを確認すると、急いで部屋を出てダイニングに向かった。

オレ女？

翌朝、六時に起床した和良は昨夜届けられた衣装ケースの中からタオルを取ると、洗面台へと向かった。

顔を洗って目を覚ますと、自然、体に活力が湧いてくるのが感じられる。

「よし」

気合を入れた和良が洗面台を出ると、ちょうどトイレから真理奈が出てきた。

「おはよう、カズくん」

「おはよう、マリちゃん」

和良が微笑みながら挨拶を返すと、顔を赤くした真理奈が頬を両手で押さえながらニヤニヤと笑うのを懸命に我慢する。新婚さん同様の挨拶に内心では踊りださんばかりに狂喜乱舞をしていた。

そんな真理奈の態度を訝しく思いながらも、さりとてあまり気にしないことにした和良はキッチンへ行って青いエプロンを掛けると、野菜を収納している箱からじゃがいもやきゅうり、たまねぎ、更に冷蔵庫からハムを取り出す。

「昨日はご飯炊かなかったから、ピザトーストとポテトサラダにしようと思うんだけど、それでいいかな？」

和良の確認に妄想から帰還した真理奈が頷いた。

「ああ、カズくんの作る料理はどれも美味しいから期待しているよ」「うん」

昨晚、二人で話し合って家事は交互に行おうと決めたが、基本的には掃除は自分の部屋などは自分で行うのは勿論、分担せずとも済む部分は各自負担ということになっている。

買い物も主夫としてスーパーの値段を把握している和良が務めることになっている。そもそも、真理奈は育ちが違ったために金銭感覚に多少のズレがあってそれが和良には心配だった。

真理奈は勉学や運動は得意領域だが、料理などの家事はメイドのレイカに一手に担っていたので不得手ではないが経験に乏しいのもまた事実であった。

和良がじゃがいもの皮をピーラーで剥いてコンロにかけた鍋のお湯の中に入れると、今度はもう一つ小さい鍋を出してお湯を熱し、卵を茹で始める。

その二つを茹でている間に手際よくピザトーストに使うピーマン、トマト、玉ねぎなどをスライスし、更に残った玉ねぎはポテトサラダに使うので辛味を抜くためボウルに水を入れてさらす。

スライスしたそれらの具材とスライスチーズを食パンに乗せると、オーブンに入れて焼き始めた。

一方、真理奈はリビングのソファに座って新聞紙を読んでいたが、たまに気になってちりりちりりと和良の方を見る。ちょうど、茹でたじゃがいもをボウルに入れてマッシャーで潰していた。

「何か手伝えることはあるかな？」

「えっと……じゃあテーブルを拭いて箸を用意しておいてくれるかな」

「うん、了解した」

てきぱきと布巾を水で絞って箸を置くとすぐに手持ち無沙汰になる。もう一度和良を見ると、オーブンからピザトーストを出してその上にブラックペッパーを振っていた。

真理奈はうずうずと手伝いたい衝動に駆られるが、昨日の取り決めの思い出してぐつと堪える。家事は交代制なのだから、今回はちゃんと和良に任せねばなるまい。

そう心を改めながらも、明日が待ち遠しくなった。既に自分の中で献立は決まっており、肉じゃがを作ることになっていた。まず何より愛する人に食べてもらうのは肉じゃがだろう。

よく茹でたほくほくのじゃがいもの甘みと豚肉の癖のある味、そしてそれを引き立てるにんじんと玉ねぎ、それらに醤油とみりんと砂糖で味付けをするのだが、この味付けの配分率に真理奈は絶対の

自信があつた。

甘すぎずしょっぱすぎず。甘辛いタレをレイカと共に二日も研究しそして導き出した答えこそ、自分の中で至高の肉じゃがへ至る解だと自負していた。

「はよ明日にならへんかなあ」

待ち遠しくて笑顔で呟くと、ピザトーストとレタス、更に小皿にポテトサラダを乗せて運んできた和良が不思議そうに尋ねる。

「何で？」

「ひゃわあっ!？」

奇声を発する真理奈に和良も驚いた。びっくりと仰け反る。

「え、どうしたの？」

「ななな、なんでもあらへんから、気にせんといて！ それより、はよ食べよ。な？」

何かを誤魔化してくる真理奈に苦笑しながらも、和良はそれに従うことにした。

最後に冷蔵庫から牛乳と、食器棚からグラスを出しながら真理奈へと振り返る。

「マリちゃん、また地が出てたよ」

「う、うむ、済まない。それでは朝食にしようか」

二人でダイニングテーブルに着くと、朝食をとり始める。

やにわに、真理奈が思い出したように和良を見つめる。

「そう言えば言い忘れていたが、横葉家の長男は必ず芸能について何か一つでも究めている必要があるのだが、更に余所から来る人間は四つ究めてなければならぬ。私の母君はピアノの全国コンクールで最優秀、落語の真打ち、更に本来は四つなのだが、三つ目の華道があまりにその業界で大成したので特別に三つだけで嫁に来た御人だ」

「へえ、すごいなあ。マリちゃんのお母さんか……。一度会ってみたいな」

「それは無理だろう」

口端には小さい笑み。

まずいことを聞いてしまったのだろうか。和良は自分の不躰な質問を後悔するが、真理奈はさして気に留める様子も無くピザトーストを齧る。

「何せ、世界中を飛び回って忙しい人だ。日本にいることも少ない」「え、あれ、それだけ？」

もっと不幸なことを予想していただけに、意外にも良い意味で残念な理由だったことに肩透かしを食らってしまう。

思わず尋ねてしまった和良に真理奈は眉根を寄せる。

「それだけだ？」

他に何か会えない理由でもあるだろうか、真理奈は宙を見て思索するが、そうして出てきた答えに苦笑をしてしまう。

「母君なら殺してもただでは死なない人だから大丈夫だ。ある意味、カズくんのお母様にも似ている」

きっと今頃は弁護士事務所でくしゃみでもしてるんだろうなあ、と和良はそんなことを思いながら牛乳を飲み、片付いた皿を重ねる。真理奈もすべて食べ終わったので皿を片付けていたが、その顔に僅かな微笑みが覗く。

どうしたんだろう、と和良は思ったが、何となくそれを聞くのは憚られた。理由は分からないが、きっとそれは遠い過去の記憶を思い出しているのだろうと、何となく察せたからだ。

真理奈から食器を受け取ると、和良はキッチンに入って食器洗いを始める。横では真理奈が調理に使って朝食の前に洗っていた鍋などを乾いた布巾で拭いて棚に仕舞っていく。

そうして、すっかり忘れていた頃に真理奈が口を開いた。

「カズくんもこの一年で何か四つ究めないといけないけど、何か目処はあるかい？」

そう。ここに来た当初の理由は『花婿修行』だった。修行なのだ。それ故に真理奈は当然の如くこの一年で和良が四つの芸道を究めるつもりでいると思い込んでいたので、てっきり和良は既に目ぼし

いものを見つけて準備を始めているとばかり思っていた。

無論、和良は単に花婿修行と言われても特に何かを指示されたわけでもなく、最初に家で『横葉家で一年間同居をしよう』と言われてそれに従ったままで、そんなことは思ってもみなかった。突然の真理奈の問いかけに目を白黒させる。

その素振りを見て、真理奈もさすがにまだ何も着手していない事実を察し、焦りが表情に浮かぶ。

「まさか……………」

「うん……………」

みなまで言わずとも、強張った和良の表情だけですべてを把握した。こんな新婚さんごっこをやっている余裕などなかったのだ。

あまりの緊急事態に、頭が真っ白になりながらも真理奈は必死に打開策を探す。

自分が既に修得している芸道を教えてもいいが一年で他人にすべて指南できるほど深く究めてもなく、また心を鬼にして真剣に教えることは難しいだろうと思いそれは考慮の外に置く。

では実際に教室を開いている方の門下生になってはどうかとも思ったが、教室には他にも門下生がいるので集中した師事は期待できないだろう。これも除外。

そこで白羽の矢が立ったのが、横葉芸能専門女子学院だった。ただしいくら身内とはいえ男子の入学を許可するなどという特例を認めてはくれないだろう。ならば。

「横女に通う生徒から直接マンツーマンでレッスンを受けよう。それを一年間やればきっと大丈夫だ」

力説してくる真理奈に和良は頷いたが、しかし問題が一つあった。「でも、誰か心当たりはあるの？」

和良の素朴な疑問に、真理奈は自信満々で笑った。

「お誂え向けなのが三人いるじゃないか」

F号室に集まった面々は真理奈の説明を聞いて、いかにも「やっぱり……」という表情をした。

「あんなあ、昨日車の中でカズはんが花婿修行しとりはるって聞いてなあ、あて、てつきりなんかそういうんしたはりますんかな思うたんやけど、しとらんかったの？」

「私も今朝まではてつきりそう思い込んでいたが、本人に尋ねたらどうもそうではないらしい。そこで、三人にそれぞれ得意な芸を御教受頂きたい」

真理奈の応答に紗和と美弥は露骨に難しそうな顔をするが、一人だけすつと手を挙げた。咲だった。

「さつちい？」

紗和が驚きながら見れば、咲は相変わらぬ無表情を和良に向ける。

和良はそれに真剣に見つめ返してその言葉を待つ。

「本気？」

「——うん」

確認するように咲が尋ねてくるので、和良は重々しく頷いた。

和良自信もただ漠然と日常を過ごすより、ちゃんと明確な目標に向かって日々を大切に過ごすことに異論は無く、かつ真理奈との婚約を考えれば必要なことでもあった。

その瞳に決意を認めた咲は、真理奈の方を見た。

「金曜日は一日射場が空いている。その日なら射を教えられる」

「さつちい、おおき——にゆい!？」

咲の言葉に顔を輝かせた咲に真理奈が抱き付こうとして、咲の手がその顔を押さえた。大事なことをまだ付け加えていないこともあったが、単純に両刀の変態に抱き付かれるのは嫌だった。

無表情はまったく変えず、念を押すように口をゆっくりと開く。

「ただし、もし少しでも誠意が感じられなければ即中断する。それでいいなら、いい」

「ありがとつ、恩に着るよ」

笑顔で言ってくる和良に、咲は不思議にも悪い気はしなかった。逆に何か照れくさいものを感じて、視線を逸らして「別にいい」ただけ呟く。

その光景を見つめていた紗和も、意を決して頷いた。

「あても茶道でええんならよろしゅどす。お道具はあての部屋にあるさかい、いつでも準備はできはるけど、学院の授業が無い日は木曜と金曜しかないですえ」

「えつと、じゃあ木曜日をお願いします。一生懸命頑張ります」

「あい」

「ミイもカズおにちゃんのためなら一肌脱ぐ！」

最後に美弥が威勢よく手を挙げた。

「ミイはね、高校で吹奏楽部やってたから、琴道を教えるね！」

「キンドウ？」

聞き慣れない言葉に和良が首を傾げると、横に座っていた真理奈がにこやかに微笑む。

「琴の道と書いて琴道だ。古くは奈良時代にまで遡り、正確に言うならば箏として発展した由緒正しい日本の芸道だ」

真理奈の解説にほお、と一同が感心する。言い出した美弥までもがへー、と感心してしまう始末だった。

日本の伝統芸能であるにも関わらずここまで馴染みが薄いことに真理奈は寂寥を覚えるが、それは今は気にしないことにした。今の自分は横葉家の長女ではなく、小田和良の婚約者なのだ。

「それで、何曜日なら大丈夫だ？」

真理奈の質問に美弥は額に拳を付けて考える人のポーズを取るが、全員がその言葉に注目している先で不意に笑ったと思うと、

「まだ授業始まってないからわかんないや、あはは」

軽く笑う美弥に真理奈は苦笑いをした。

そして一度自室に下がると、何か冊子を持って戻ってきた。

「これが今年の一年生のシラバスだ。音楽科は専攻によっても異なるが、琴ならば火曜と木曜は一年生はあまりセメスターもなく時間

割が入らないだろう。火曜日に頼めるかな？」

「いいよお！ よろしくね、カズおにいちゃん」

「うん、よろしく」

互いに頭を下げて礼をしあうと、それを見ていた真理奈はこれで一段落かと思いつつ、まだ重要なことが残されていた。

余所から来る場合は四つの芸道が必要になる。あと一つ、足りないのだ。

後は、そのもう一人が誰か心当たりはないか上級生である紗和と咲に聞くしかない。

真理奈は姿勢を正すと、二人へと向き直る。

「誰か、もう一人こういうことに向いている人物はいないだろうか？」

「んー、と天井を見つめて考える紗和の横で、咲がゆっくりと口を開いた。

「三日前にC号室に新しい子が入った。確か、オレ女」

「オレ女？」

真理奈が不思議そうに繰り返すと、咲が首肯する。その横で、思い出したように紗和も両手を合わせて真理奈を見遣る。

「そやったなあ。確か、川崎大志て名乗ってはった思いますえ」

どういう人物なのかと年下の三人は怪訝な表情を浮かべるが、朗らかに笑う紗和を見て悪い人物でないだろうし、何より協力してくれそうなら人物なら頼んでみる価値はあると思い、その人に当たってみることにした。

五人はB号室の前に集まると、和良が緊張で震える指を伸ばしてインターホンを鳴らした。すぐに中で歩いてくる音が聞こえ、「ど

なたでしょうか？」と少し低い声が聞こえてくる。

和良は何とさえいいか分からず、まず自己紹介をすることにした。

「えっと、小田和良って言います、今度奥のF号室に一年間住むんですけど、お願いがあつて来ました」

拙い口調で言う和良の自己紹介を聞いて、後ろの四人はダメかなと半ば諦めかけていたが、突然ボタンとドアが強く開け放たれ一斉に面食らう。まさか開けるとは思いもしなかった。

そして現れたボーイッシュな黒髪と鋭い目付きが特徴的が川崎大志は、不信任感も露わに和良をじろじろと眺め、そして疑いの目を向ける。

「男なのになんでこの寮に住めんだよ？」

高圧的な口調を意に介さず、和良は頭を掻いて後ろの真理奈を見る。

「あそこにいるマリちゃんの口利きで一年間入居させてもらうことになって。それで、その間に芸道を学ばなきゃいけないから、もし良かったらばくに教えてもらえないかなって」

「はあ？ お前さ、頭大丈夫か？ 突然んなこと言われてさ、『あ、そうなんすかいっすよー』って言うほどオレがとつぱい性格に見えるのかよ？」

「あ、オレ女だ」

「オレ女だな」

「オレ女だあ」

「せやなあ」

四人が異口同音に強調し、それに咲が無言で頷く。

その正面ではオレ女と呼ばれた川崎大志が顔を俯けて俄かに震えていたが、やがて顔を上げると憤怒の形相で五人を睨んできた。

「オレ女って、言うなあっ！！！！！」

声を張り上げる川崎大志に驚きを禁じ得ない五人はその場で立ち尽くすが、たちまち川崎大志が中に戻ってバタンと扉を閉めたので、啞然とドアを見つめる。

「オレ女って呼ばれるの、ヤだっただね……」

申し訳無さそうに美弥が言つと、他の面々も配慮が欠けていたことに深く自責する。

おもむろに顔を上げた和良はもう一度インターホンを鳴らすと、ドアの前まで詰め寄る。

「川崎さん、さっきは酷いことを言つてごめん。もう絶対に気を悪くするようなことは言わないように気をつけるから、せめてご近所さんとしてたまに話したりできないかな？」

ドアの向こうからは返事が無いが、構わずに和良は続ける。

「ぼく、この通り軟弱だし、誰に対してもそういう風に自分を主張できないから、川崎さんの言葉遣いとか見習いたいし……ダメ、かな？」

しん、と中は静まり返っていたが、やおらにドアがキィ、と微かに開く。

「和良だけ入ってくれ。他のヤツは要らねえ」

短い、素っ気無い声で言われたが、和良は破顔して頷く。

「うん、じゃあ、お邪魔させてもらっよ」

「——カズくん、私たちは邪魔なようだからF号室に戻っているが、全員先ほどの無礼は申し訳なく思っていることを伝えてもらいたいんだが……」

「うん、ちゃんと伝えるよ」

それを聞いた四人は硬かった表情を少しだけ和らげ、邪魔にならないよう部屋へと戻ってゆく。

深呼吸を一度した和良は、薄く開いた扉を開けて玄関に入る。サッカーボールや自転車の空気入れなどが玄関にはあった。

それらを見てから中へと入って行き、リビングへと入ると川崎大志がソファに不貞腐れたように片膝を立てて座っていた。

部屋全体が比較的男勝りな外観だった。床には無造作に服が散乱していたり、キッチンにはカップラーメンの空容器などがあることから家事が苦手なことが窺える。

咲も家事はあまりせず料理と洗濯は紗和に任せ切りらしいが、それでも部屋の片付けくらいは自分でやる。むしろ、無断で紗和が咲の部屋に入ると怒って丸一週間は口を聞かなかったこともあったらしい。

それを見ると、川崎大志の部屋はあんまりだった。

ずっと家で家事をやってきた和良は掃除や洗濯をしたい気持ちむらむらとこみ上げてくるが、今は懸命に堪えて川崎大志の向かい側の床に座る。

川崎大志はそれを見ながら特に何も言わず黙っていたが、やがて膝をソファから落として同じく床に座る。

「本当にさっきのこと悪いと思ってるのかよ？」

詰問するような目を和良に投げかける。

和良は膝の上に置いている拳に力をこめると、昔の自分の経験思い出しながら純粋に申し訳なく思いそれに頷く。自分もまた、中学時代には男のくせに体育が苦手で家庭科の成績ばかりが良かったためか、クラスの男子にそれを揶揄されて女男と呼ばれていたこともあった。和良自身はあまり気にしていなかったが、当時転校してきた真理奈がそれを見咎めたりもした。

あだ名は時として誰かに不快な思いをさせてしまうことがあるのだ。

「ぼくも、他の四人も悪気はなくて、だから本当に申し訳なく思ってる。ぼくも昔は女男って呼ばれたりしてたから。だから次からは絶対に気をつける」

「……………川崎大志。昔っから”ダイシ”なのになぜか知んねーけど、”タイシ”ってみんなに間違われて呼ばれる。まあ、タイシって響きも力ッコいいしそっちはあんま気にしてねーから、もし呼ぶんだったら呼び捨てでダイシかタイシでいいぜ」

ばつが悪くなった大志はそっぽを向きながら投げやりに言う。それでも許してくれたことを嬉しく思い、和良は顔を綻ばせた。

「うん、よろしくね。タイシ。ぼくのことにも気軽にカズって呼んでくれればいいから」

「——おう」

伸ばされた手を、大志は恥ずかしさから唇を僅かに尖らせながら握って仲直りの握手をする。

そうして離れた手を少し見つめてから、大志はまた和良に向き直る。

「それとさっきのだけど、交換条件で書道を教えるのを引き受けてやってもいいぜ。オレ、書家を目指してっからその練習にもなるしな。ただ、見ての通り部屋が散らかってっただろ？ カズが週一で掃除とかやってくれっとスッゲー助かるわ」

「うん、いいよ。それと台所もちらりと見えたけど、カップラーメンばかりじゃ体に悪いし、もし良ければぼくの部屋がこの階のF号室だから事前に言ってくればタイシの分も作るよ」

「え、マジかよ？ んじゃ、そうさせてもらうかな！」

身を乗り出して喜ぶ大志を見て、和良はそれを嬉しく思った。

何となくだが、男友達ができたとような感覚が嬉しかった。この通りの気質なので中学でも高校でも親しい男友達はおらず、いつも真理奈や高校では家庭部の女子とばかり話していた気がする。

それも楽しいことは楽しかったが、やはりこういう気軽に話せる相手というのもまたいてくれると助かる。

「うん、腕によりをかけて作るよ」

「へへっ」

互いに打ち解けると、和良は試しに他の四人にも同じようにちゃんと紹介した方がいいと思った。

実際に話してみると言葉遣いこそ粗暴だが、頑固なわけではなくむしろ積極的に話しかけてくる。きっと他の四人とも上手くやれるだろう。

「あのさ、それでみんなともちゃんと紹介させてほしいと思うんだ。みんなもすぐく気にしてたし……」

大志は口を真一文字に結んでいたが、一つ舌打ちをすると頭をぼさぼさに掻く。

その雰囲気から、どうやら受け入れてくれそうなことに和良は安心した。

「う、ああ、わーったよ。ただし馴れ合うつもりはねーからな」

念を押してくる大志に頷くと、和良は立ち上がって玄関へと向かう。大志もそれに続いて靴箱の上に置いてあるカードキーを手に取ると玄関を出た。

十五階の奥にあるF号室へ行くと、和良が先に立ってインターホンを鳴らした。

すぐに足音が聞こえ、ドアが開くと真理奈が顔を出す。

「はい、あ、カズくん」

真理奈の声に応じて頷くと、和良は真理奈に大志が見えるよう横に避けた。

「書道を教えてくれることになった川崎大志で、ダイシかタイシって呼び捨てにしてほしいって」

「そうか。よろしく、タイシ。そして先ほどはいきなり失礼なことを言って済まなかった」

「ああ、いいよもう。さっきもカズから何度も謝られたしよ。で、お前は？」

「横葉真理奈だ、この寮の舎監を務めている」

「シャカン？ って、何だよ？」

聞き慣れない言葉に大志が目を細めると、代わって和良が口を開いた。

「この寮の管理人だよ。例えば寮に何か問題があったら相談したり、他にも寮生の悩みを聞いたり、そういうことをしてくれる人かな」

「あっそ。よろしくね、真理奈」

「マリでいいぞ」

互いに握手を交わすと、F号室の中に入ることにした。

リビングには他の三人もソファに座って話しをしていたが、和良たちが入ってくると中断してじっと大志を見つめ、それぞれがさつと立ち上がって頭を下げた。

「ごめんなさい」

「えろうすんまへんどしたなあ」

「ごめん」

美弥は本当に申し訳無さそうに謝り、紗和や咲も普段はあまり変わらない表情に申し訳なさを滲ませながら謝る。

それに苛立だしく頭を掻いた大志は一步前に踏み出すと、

「いーからお頭上げろよ、イライラする！ 別にもういーから。」

つたく、オレは川崎大志な。タイシって呼び捨てにしてくれ」

最後に付け加えた大志に三人は顔を上げると、戸惑いながらも一番に咲が身を乗り出す。

「先日も紹介いただいた。改めてあたしは茅賀咲。さっちい。よろしく」

「あてもおらしたんやけど、いちおうね、不二紗和。サワって呼んでおくれやす」

「ミイは鴨野美弥。ミイって呼んでね」

それを聞いていた大志は、あれ？ と首を傾げた。

「なあ、こいつ誰の妹なんだ？ オレはこっちの和服の女の妹だとばっか思ってたんだけど」

言って、咲の頭に手を乗せた大志に全員がしんと押し黙る。

大志はそれに気付かず、不思議そうに全員の顔を見回すが、誰も答えようとしない。やがて咲が口を開いた。

「横葉芸能専門女子学院二年。来月で二十歳」

「ええええええええつ！？」

思わず手を離して狼狽える大志に、全員が苦笑をする。

そうして紗和が朗らかに笑いながら止めの一撃を口にする。

「タイシはんもやばなお人やねえ」

「いや、だってよ、え、ええええええええ！？」
「別に、気にしてない」

（その後）

六人が互いに和解した記念に写真を一枚撮ると、晴れて咲に許しを頂いた大志が全員にメールアドレスを赤外線ですべて交流を深めた。

そんな中で一人、真理奈だけが蚊帳の外であることが和良は気になって仕方が無かった。

「ねえ、マリちゃん。ぼくが携帯電話の使い方を教えるから明日買に行こう？ そしたらいつでも連絡をすぐとれるようになるし、正直、高校の時もそれで話す機会がなかなか無かったし」

「カズくん……うちのことそないに考えてくれはってたなんて、うち感激やわあっ！！」

抱き付いてくる真理奈を宥めていると、和良はみんなの視線に気が付いてと取り合えず引き離すことにした。

しかし。

「ミイもおっ！」

「……………面白そう」

「え、さっちい行くん？ せやったらあてもお」

全員がもみくちやになって和良が呻いている中で、唯一人近寄らずに困惑している大志を今度はみんなが見つめる。

「オ、オレはそんな風に馴れ合わねーからなっ！ ぜってーんなことやんねーからなッ！」

「……えー？」「……」

「オレはぜってーやんねーっ！っ！っ！っ！っ！」

顔を真つ赤にして叫びながらも、一分後に女子が互いにじゃれつくのに夢中になった頃合いを見計らって、そつと背後から和良の背中に寄り添う大志だった。

オレ女？（後書き）

やっと全員揃いました（汗

ここまでで一章『桜咲く』として書いてきましたが、何か批評などがあればどうぞお願いします！

この後もまだ携帯電話を買いに行ったり花見に行ったりしますが、もうすぐ話の本筋である芸道の稽古もちよくちよく入ってくると思います。

明るく楽しい話を考えているので、ニヤニヤしながら読んで頂ければ嬉しいです！

幕間・これから（前書き）

一章と二章の幕間です。一章で仄めかしてた和良と真理奈の出会いや、描けなかった横女の入学式なんかをば。そして一章のタイトルが【桜咲く】なので最後にひっそりと桜を入れましたが伏線を盛り込んでしまい、やや蛇足気味に……（あわわわ

幕間・これから

土曜日。

和良と真理奈は二人で携帯電話をかうためにdecomoshoppに来ていた。昨日の六人が集まっていた段階では全員で真理奈の携帯電話を選ぶ方針を取っていたが、いざいつ買いに行くかという段取りになって、早い方がいいだろうという和良の提案の下に翌日の今日が選ばれた。

ところがそこで、紗和は横女の入学式が今日執り行われることを思い出した。そしてその式は新生だけではなく、上級生である二年生も全員参加だ。今年入ってくる後輩と心をつにするために、また、一つの契機として心を入れ替えるために全学年を式に参加させるのが学院の方針なのだそうだ。

横女の新生である美弥と大志は勿論、紗和と咲も入学式のために同行できないことを残念に思っていた。

しかし真理奈自身はそう残念でもなかった。寂しいと言えば寂しいが、数年振りに和良とデート（ただし和良の認識は異なる）をするのはとても楽しみだった。昨夜は昂奮で寝付けず、一睡もしないままに朝になってしまったほどだ。

そんな張り切り具合を見せる真理奈を面白く思いながら、decomoshoppの入り口で和良は隣に立つ真理奈を見た。

「こういう携帯電話がほしいうつのある？」

例えば家の土地があまりに広いので迷ったときのためにGPS機能付きだったり、お風呂に落としても大丈夫なように防水加工されていたり、音割れしているのではないかと錯覚してしまうほど高音質なオーディオ搭載など、昨今の携帯電話は様々な機能が付いている。

単純に外見で選ぶのもいいかもしれないが、テレビの視聴予約機能さえもとに使えない機械音痴な真理奈には使いたい機能だけが

付いている携帯電話の方がいいだろう。

真理奈は期待に目を輝かせて笑顔を浮かべた。

「うむ、あるぞ。悪の巨大ロボットが現れた時に同じく巨大ロボットにトランスフォームして戦う携帯電話だ」

「ソントバンクが昔テレビ番組と提携して作った変形ロボットの携帯電話があるからそれにしよう」

「うむ！」

一度 decomo ショップを出ると、その足で斜交いのソントバンクの営業所へと向かう。信号はちょうど青で、二人は横断歩道を渡ると店に入った。

店員が挨拶してくるので整理券を機械で発行して、順番を待つ。

待っている間暇だったので、手慰みに眼鏡拭き用のクロスをポケットから出して眼鏡を拭く。

真理奈はその横顔を見ながら、何気なく首から提げている貝殻のペンダントを握った。

「カズくんは覚えてるかな、私たちが初めて話したときのことを……」

その言葉に和良は遠い過去の記憶を思い返していた。

自分が中学一年生だった秋。文化祭を直前にしてその女の子はクラスに転校してきた。大阪弁を話す彼女は男女の分け隔てなく気軽に話しかけるので、すぐにクラスに溶け込んでいった。地味で何の取り得も無い自分とは正に対の存在だった。

そして女の子が転校してきた二日後の家庭科の調理実習で、転機は訪れた。家でも家事をやっている和良はいつも通りにハンバーグとシチューを作っていたが、その手際の良さに同じ班の女の子などが黄色い声を挙げると、それを快く思わない男子が僻みから、あだ名である『女男のクセに』と突っ掛かってきたのである。いつもならば口だけで済むので和良は気にすることなく愛想笑いをしていたが、それが癪に障ったのだらう、男子が思いつきり肩を押してきた。

衝撃で掛けていた眼鏡が落ちると同時、和良自身も床に尻餅を突いてしまった。そして起き上がるうとした矢先に、頬を打つ乾いた音が教室に響いた。

——和良を押した男子が頬を赤くして、自分を打った女の子を泣き出しそうな目で見つめていた。

『料理できひんからってやつかむ自分の方がよっぽど女々しいわ！』
そうして眼鏡を拾って自分に渡してくれた女の子こそ横葉真理奈だった。初めて面と向かって二人が話した瞬間だった。その後は色々であったが、結果的には相手の男子もそれを反省して、以来、和良のことを『女男』と呼ばなくなった。

眼鏡を拭き終わって顔に掛けると、和良は真理奈に振り返った。

「うん、覚えてるよ。いきなり男子生徒の顔を叩くなんて、びっくりしたよ」

和良が笑うと、真理奈は顔を真っ赤にした。

「そんなんちゃうやん！ せやのうて、眼鏡や、眼鏡」

「うん、その後にぼくに拾って渡してくれたときだよね？」

「そやけどビミョーにちゃうわあつ！——そんな時にな、うちが」

鈍い和良にもどかしくなった真理奈が言いかけたが、店内アナウンスが鳴って番号札が呼ばれた為に和良は立ち上がる。

「呼ばれたから行こうか。それとまた地が出てるよ」

「うう〜」

やきもきとしながらも、和良の後に続いて指定のカウンターへと向かう。

カウンターへ行くと店員の女性が気遣って隣の椅子を持ってきた。それに礼を言って和良が座ると、正面には真理奈が座る。

「それで、本日はどのようなご用件でしょうか？」

「えつとですね……」

何を言えいいか分からず和良の方に視線で助けを請うと、和良が椅子を進めて真理奈の横に並ぶ。

「携帯を新規に契約したいんですが、フォンプレイパーってまだ在

庫はありますか？」

「今在庫を確認いたしますので少々お時間を取らせていただきますがよろしいでしょうか？」

「はい、いいですよ」

店員が奥に引つ込むと真理奈が緊張からか奥の方を覗こうと少し姿勢を変える。

真理奈の椅子が倒れないようにと後ろから椅子を支えようかどうしようかと和良が悩んでいると、すぐに店員はカウンターに戻ってきた。

「シルバーでよろしければただいまこちらの一台限りございますが、それともブラックをお取り寄せいたしますでしょうか？」

「どうする？」

和良の問いに真理奈は少し悩んだが、すぐに首を振った。

「いや、シルバーで頼むよ。黒だと悪役みたいになっちゃう」

とても明快な理由に店員ともども笑ってしまった和良を、真理奈は少し拗ねて睨みながらも、会計を済ませて携帯電話を購入した。

入学式は横浜にあるバシフィコ横浜の大ホールで催されていた。

天井の貝殻のような造形が海を連想させ、その造形美は鑑賞に値する芸術であった。

始めこそ美弥は、その綺麗なホールのあちらこちらを興味深そうに眺めていたものの、いざ式が始まると既にこの会場に飽きて睡魔に襲われていた。

式の最初には理事長である横葉真央の挨拶があった。そして横女の代表生徒がステージに上がって新入生歓迎の祝辞を送り、次に新入生代表が答辞を済ませる。その頃には美弥は夢うつつの境界をさまよっていた。加えて、このホールの外観が海に近い為か、優しい浮遊感に包まれてそれがより一層と眠気を促進していた。

教務主任の先生がステージに上がると、いよいよ式のメインである新入生の点呼が始まる。新入生百四十五名が五十音順に呼ばれるのだ。

名前を呼ばれた生徒は大きく返事をして立ち上がり、礼をするとすぐに着席する。

「——1年生、鴨野美弥」

しん、とホールが静寂に包まれていたが、該当するはずの生徒が立ち上がらないことにホールがざわめき出す。自由席なので美弥の隣に座った大志が不審に思っ て見れば、美弥はソファに腰を預けて完全にいびきを掻いていた。慌てた大志が揺り起こすと、美弥が微かに目を覚ます。

そんな本人たちの事情は知らず、一度間を置いた教務主任がもう一度点呼を試みる。

「1年生、鴨野美弥」

「ふやいつ!？」

半分寝惚けながら返事をして立ち上がった美弥に、会場はクスクス笑いを禁じ得なかった。それにも関わらず、眠気に抗い切れなかった美弥は脱力してフラフラとソファに着席すると再びいびきを掻き始める。隣に座る大志は目を覆いながら、自分はしっかりと新入生として姿勢のいい姿を見せようと決意する。

鴨野と川崎なのですぐに順番が来るはずの大志は身構えながら、今や遅しと口で息を始める。

「——1年生、かやませりか加山芹佳」

「はい」

ふわふわの茶髪を靡かせた女子が立ち上がり、礼をして座る。『かも』の次に『かや』と来たので、次に自分が来てもおかしくはないだろう。視線を教務主任の口に集中して、その一字一句を見逃すまいと見据える。

「1年生、かわさき——」

「はい!」

腹から出した大志の声に被せるように、教務主任がマイク越しに声を被せる。

「——小詠こよみ」

「……はい」

勢い良く立ち上がった大志に続けて、別の女子が返事をして立ち上がる。大志は羞恥心から顔を赤らめ、慌てて席に座ると、どうしても耳が熱くなり神経が研ぎ澄まされる。周囲の囁き声が、すべて自分を笑っている声に聞こえてしまう。

教務主任は美弥の時もそうだったが、何食わぬ顔で川崎小詠が席に直るのを確かめると、次の生徒を呼ぶことにした。

「1年生、川崎大志」

「——はい……」

小さく返事をして立ち上がった大志はぺこりと小さく会釈だけしてすぐに席に戻った。否、恥ずかしくて自分が今何をしているのかさえ正直分かっていなかった。

一階の、前の方に座る新入生たちからは少し離れた二年生の列に座っていた紗和と咲は、その光景を見ながら片方は嬉しそうに笑い、もう片方はそれを無表情に眺めていた。

「よかったわあ、あてだけやあらへんくて」

「藤咲さん」

「思い出させんといてえ？」

第一、茅賀という名字自体が珍しいので、フライングしてしまった人も人違いである確立は随分と低い。はつきり言って卑怯だ。そんな思いを込めて睨むが、咲には暖簾に腕押しだった。

このネタで二日間イジられた紗和には一種のトラウマだった。そして、今後数日間は大志も自分と同じ思いをするのだろうと思うと、哀れみが止め処なく溢れてきた。

「きばっていきいや、タイシはん……」

願いと同情を込めて大志のために祈った。

式は新入生の点呼が終わると予定より早い十二時半で終わった。本当ならばあと二十分はあるはずだったが、進行が思ったよりスムーズだったことと最後のスポンサーからの祝電を省略したためであった。

ロビーで携帯電話を使って集合した四人は、早く終わったのでこれから横浜駅で和良と真理奈の二人と合流しようという話になった。「タイシはん気にしなはんなあ。誰かて間違えるときはあるんやし

……」

「うつせー、オレは別に気にしてなんかねーよ！」

「あはははは〜」

「……藤咲さん」

「さつちい、あてのこといびるん好きなん？」

泣きそうになる紗和を見ながら、咲はあまり考えずに頷いた。

「さつちいのイケズう〜！！」

「あ、おい！ サワ！」

おおよ、と和服の袖で目を押さえながら走り出す紗和を、大志は和服で走ったら危ないんじゃないかと案じて呼び止めるが一足遅かった。和服の裾を踏んで転んだ紗和に三人はビックリしながら、急いで駆け寄って助ける。

紗和はおでこを打つたらしく額を赤く腫らしていたので、大志がポケットから絆創膏を取り出して貼り付ける。

「リアルでマンガみたいに転ぶヤツ初めて見たぞ、オレ」

「あんがとなあ、タイシはん」

「サワちゃん大丈夫う？ 痛い痛い飛んでけ〜」

「ミイはんもあんがとお」

最後に紗和が期待するようにちらりと咲を見たが、咲は無愛想に視線を外したままそつと右手でその頭を撫でた。

咲が謝りたいが素直に謝れないのを知っている紗和は、それでも咲のできる限りの優しさに頬を緩める。そして咲に抱き付いた。

「えへへ。せやからあてはさっちい好きどす」

「別に……」

咲は何か恥ずかしくなったものの、今は抱かれるままでいようと思った。

横浜駅で全員集合をすると、早速真理奈がおにゅうの携帯電話を全員に披露してきた。一見ごくごく普通の携帯電話に、他のメンバーは普通の反応として機能や既にみんなの電話番号を登録したかなどを尋ねるが、それを遮って真理奈は持っている紙袋の中から何やら取り出した。プラモデルのパーツのような四角いプラスチックだ。

「はっはっはっ、これを付けるとなんと！ この携帯電話がロボットに変形するのだ！」

「ナ、ナンダッテー」

棒読みによる和良の合いの手で満悦した真理奈は、パーツを携帯電話の背面に接続部をはめて、中央から左右にパーツを展開する。更に腕を伸ばし足の部分を接続部から回転させて開くと、携帯電話に両手両脚が生える。

その時点で他の四人は「おおお！」と感動の声を上げている。唯一、和良だけは苦笑していた。実は、真理奈はこういう工作などの小手先は器用なのですぐにパーツの接続などはマスターしたのだが、肝心の携帯電話は未だに通話すらできない機械音痴っぷりだった。そう、携帯電話ではなく真理奈に取っては完全に玩具だった。

そんなことはまったく気にしない真理奈は、腕の関節部分を僅かに折り曲げ、携帯電話を開くと、その待ち受け画面にはロボットの表情が表示されていた。

「どうだ！？」

自信満々に言う真理奈に、各々が目を輝かせる。

「スツゲえええええ!!」

「ミイもそれほしい!」

「ほんまに驚いたわあ!」

「うん」

その反応に鼻高々な真理奈を見ながら、和良は真理奈がそれで満足しているならこれはこれでアリなんじゃないかと思い直した。何も通話するだけが携帯電話の目的ではないのだから。

それでも、せめていつでも連絡が取れるように通話の手順だけはしっかりと覚えさせなくては、と頭の片隅にしっかりと刻み込むことは忘れない。

そうして腕時計を見れば既に時刻は一時を過ぎていた。まだ真理奈たちは携帯電話ロボットで遊んでいるが、そろそろお腹も空く時間だろうと和良は思った。

「寮に帰る前に、みんなで昼ご飯を食べていかない?」

和良の提案に一番賛同の声を挙げたのは大志だった。

「おっしや、それならマッグに行こうぜ! 確かここから近いはずだしさ」

「マッグ?」

はて、と首を傾げる真理奈を全員が意外の目で見る。

「マッグってねえ、ハンバーガーとかポテトを売ってるファストフード店なんだけど、結構人気あるよお?」

「む、そうなのか? ならば一度足を運んでみるのも悪くは無いな」
全員一致でマッグに決まると、横浜駅西口を出て一路マグドナルドを目指すと、店はすぐ近くにあった。

列に並んで順番を待ち、それぞれ自分が食べたいものを言っていく。初めて来た真理奈は和良と同じものを頼み、全員のトレーが来たら二階の奥へと進む。ソファに左から真理奈、和良、美弥。椅子側には大志、紗和、咲が座った。

大志は食欲旺盛なのかビッグマッグバーガーとてりやきマッグバーガーの二つにコーラと一番多く頼んでいた。一方、アップルパイ

とマッグシェイクしか頼まなかった美弥は大志の食欲に釣られてお腹が空き、隣に座る和良の方へと詰め寄る。

「カズおにいちちゃん、ミィね、えっびフィレオもちよつと食べたいなあ」

ダメ？ と上目遣いで見てくる美弥に、和良は持っているえびフィレオを差し出した。

「いいよ、半分こしようか」

「うん、半分も要らないから、一口だけ」

「え、いいの？」

「うん！」

頷いた美弥は小さい口で本当に一口だけ食べると、後はアップルの包みを開け始めた。

それを見ていた真理奈も対抗心を燃やして、和良へとにじり寄る。

「うちもえびフィレオ食べたいなあ、カズくん」

「うん、だからマリちゃんはえびフィレオを注文したんじゃないの？」

「ちやうねん、せやからね、そんなあ、カズくんの、」

「え？」

顔を赤くした真理奈が息を大きく吸い込んだ。

「カズくんを食いたいんねん！」

店内を静謐が襲った。

同じく二階にいた他の客は真理奈の声に話を止めてこちらを窺うように見てきたが、当の真理奈はそんなことに気付かず和良へと詰め寄る。

和良はほんとに困り果て、苦笑する外無い。

「えっと、ぼくのを、食べたいの？」

念の為に尋ねると、真理奈が大袈裟に首を縦に振った。あまりに早くて残像が見える。

取り合えず自分のえびフィレオを真理奈に差し出すと、真理奈はゆっくりとそれに近付き、カブツと一口だけ食べた。

それを味わうように咀嚼し、ごくんと嚥下する。

「……美味しい？」

「うん、ごつつうまいでえ」

満面の笑みで言う真理奈に満足して、ようやく和良が食べようとした時だった。斜めに座っている大志が物欲しげにこちらを凝視していることに気付いた。勿論、こちらと言ってもこちらの手元に、だが。

和良は微笑むと、大志の前に自分のえびフィレオを差し出す。

「タイシも食べる？」

「いいのか！？」

ぴよこんと腰を浮かして迫る大志に、和良は頷いた。

「んじゃあ——」

ガブリと一度に四分の一を喰らって席へと戻る。

「んう、んめえっ」

「それなら良かった」

そうして和良も食べ始めるが、その光景を見ていた紗和が昂奮して食事が進んでいないので、咲は紗和のお尻を軽く抓った。

「ひゃんっ！？」

「サワ、食べない？」

「あ、ああ、今いただきますえ」

やっぱり変態にはある程度教育として厳しい躾けが必要かもしれない。改めてそのことを感じ入ると同時に、咲は一連の流れを見ていて下級生が尽く和良に餌付けされていることに不安を抱いた。

（これ以上変態が増えないといいけど）

何せ真理奈と紗和だけで変態成分は十分むしろ過剰だった。大志は食欲に完全に支配されているのでまだ大丈夫だろうが、美弥が不安だった。気分屋なところが時折見受けられるが、往々にして和良にべったりである。

自分が上手く立ち回ってあまり変な行動はさせないようにしなければ。

心密かに、咲は決心するのだった。

相鉄線で帰る途中、米軍基地で行われている桜まつりが目に入った六人は急遽お花見をすることにした。

ゲートを潜って敷地内に入り、金属探知機のゲートを通るとベース内へと入場できた。

道に沿って植えられている桜を見ながら六人は感嘆を上げる。

「雅やねえ」

「うん」

朗らかに笑いながら桜に見入る紗和に、咲も微笑を湛えて頷いた。ちょうどピークを迎えた桜は美しく咲き誇り、風が吹くとその満開の花卉を風に乘せて散らせる。

その風景を携帯電話の写メで美弥が撮影し、自慢げに和良へと見せる。

「どお？」

「綺麗に撮れてるよ」

「えへへ、うん！」

その後ろに続きながら、真理奈は瞳に焼き付けるように桜の一本一本を見つめて、その風流を楽しむ。

隣を歩く大志は真理奈に買ってもらった焼きそばを食べながら、同じく桜を見つめて進む。

「タイシは書家を目指しているんだっただ。どうだ？ こういう自然を見ると心が清まるものか？」

「んー、書道の心得は見る者にそれを伝えることだかな。逆に意欲が湧いてくる感じだな」

「そうか……」

その意味を噛み締めながら、真理奈は立ち止まる。

伝えるべきこと。伝えたい気持ち。

たくさんあるが、今はそつと胸に仕舞うことにした。

焦っても、仕方が無いのだ。

「あんな、うち、できればずっと……」

誰にともなく、真理奈は囁いて笑った。

それは誰にも言えない願い。そして、来年には言わなければなら
ない願い。

それでも楽しい今を失いたくないが故に、今はそつと胸に。

（その後）

米軍基地ではしゃいだ為か、美弥が和良の膝に頭を預けて眠って
いた。その横に座る真理奈の肩には、満腹になって眠くなった大志
が頭を預けていた。

向かい側の席で紗和がその膝に咲を座らせて何事かを話していた。
親しげに話す姿は無二の親友のようでもあったが、ある種、姉妹の
ようにも見える。

「もし本当の姉妹だったら、どっちがお姉さんだろうね？」

和良の質問に真理奈が二人の様子を見つめる。体格や雰囲気で決
めるならば紗和だが、どちらかというと紗和が咲に甘えているよう
にも見て取れる。さしずめ大きい妹と言ったところだろうか。

考えていることは同じらしく、真理奈が小さく笑うとそれに釣ら
れて和良も小さく笑った。

すると、向こうもこちらを見て笑っている。紗和だけならまだ分
かるが、咲までもが笑っているのは珍しい。

和良はどうして笑われているんだろうと考えたが、考えても出て
来ない。

逸早く察していた真理奈はそんな鈍い和良にもどかしく思いながらも、敢えてそれを言わず、黙って手を伸ばして和良の手と重ねる。和良は考えるのに夢中なのか、まったく気付かない。

（ニブチンやなあ……）

小さく、苦笑した。

幕間・これから（後書き）

次話から二章突入！ ようやくお稽古始まるお！

は？ パンツ？

日曜日是一日、真理奈に携帯電話の使い方を教えるのに費やしてしまっただが、それによりようやく真理奈も着信を受け取ることと受信したメールを見ることはできるようになった。小鹿が自力で立ち上げられるようになったくらいの進歩だが、真理奈にしてみれば偉大な一歩でもあった。

そうして月曜日。今朝は早くから起床すると、和良は昨日の夜に食べた肉じやがが胃に残っている気がして具合が悪かった。味は料亭で出しても人気料理の一つになるだろうと思えるほど絶品だったが、何分量が多かった。

昨夜は真理奈が張り切って料理をした結果、力士部屋で作るちゃんこ鍋に匹敵するのではないかという量を生産され、急遽他の四人を招聘して消費したのだが、美弥と紗和はまったくの戦力外。意外にも男子と同じ量を食べた咲も哀しいかな、広大な砂漠によろよく見えたオアシス程度の規模しか減らせなかった。

有力株に思えた大志も健闘虚しく途中で矢折れ力尽き、和良だけが最後には孤独な戦いを繰り広げた。

何度も嗚咽を堪え、汁で無理矢理喉に流し込んだ末に、無事に肉じやがを完食することはできた。しかし、その代償は余りに大きかった。

教訓として最後に、真理奈に大鍋使用禁止令を和良は発した。レストランで使うようなメートル以上もある寸胴鍋をどこから用意したのかは謎だったが、恐らく爺やさん辺りが怪しいだろうと目星を付けながら。

ベッドから起きた和良は衣装ケースからタオルを取ると洗面台へと向かう。顔を洗って目を覚ますと、今度はキッチンへ行って青いエプロンをかけた。

野菜箱からきゅうりとにんじんを取り出すと、それらを水洗いし

てから半分に切り、そうして縦に切っていく。数分とかからずスティックサラダが完成した。

冷蔵庫からマヨネーズを取り出すと、小皿に盛ってスティックサラダに付ける。ポリポリとにんじんを兔のように食べていく。

（今日はもうこれだけでいいんだけどなあ……）

だが、今日は自分が料理当番であり、しかも月曜と木曜と土曜は大志が朝ご飯を食べに来る日だった。腹持ちと栄養素の両方を考えると、これでは到底食が進まないだろう。

キャベツの千切りとコロツケ、味噌汁、ひじきでどうだろうか。適当に献立を考えてみて、栄養素を鑑みるとそこまで悪くない気がした。これに目玉焼きを加えれば大丈夫だろう。早速和良は料理に取り掛かることにした。

じゃがいもを茹でている間にキャベツを千切りにすると、今度はひじきに取り掛かる。途中で起きてきた真理奈がトイレに向かう足を止めて、キッチンの脇に置かれているスティックサラダを見付ける。

きゅうりを一本取って口に銜えると、その反対側の先端を和良に向けた。

「……………マリちゃん、何してるの？」

真理奈は誤魔化すようにポリポリときゅうりを食べると、黙ってトイレに行くことにした。顔が熱かったが、鈍い和良はまったく気付いていないだろうと平然を装ってキッチンの脇を通り抜ける。

予想通り、和良は頭を傾げただけで特に何も言わず料理を再開した。

トイレに入った真理奈は一人になって落ち着くと急にさきほどのことが恥ずかしくなり、横の壁を平手で叩く。言葉は出なく、ただ恥ずかしさだけが込み上げてきた。

そうしてトイレを出てからスティックサラダを見ると、今度は別の方策が思い浮かぶ。即ち、胸の谷間に挟んで差し出したら食べてくれるのではないだろうか。

「カズくん、うちのここ食べてえな」

「うん、とっても新鮮で食べ応えがありそうだね」

笑顔で頷いた和良が自分の胸に顔を近づけてパクリ、と先端を口に含む。瞬間、冷たい舌の感触が――と妄想したところで玄関のチャイムが鳴った。朝食を食べに来た大志だろうと当たりを付けて、真理奈がキッチンから玄関へと向かいドアの鍵を開ける。

果たして客は大志だった。タンクトップにパーカー、短パンという格好は確かに大志に似合うものの、今日は和良が大志に書道を習う日なので真理奈の審査の目が厳しく光る。

「おはよう、タイシ」

「おう。――ん、いい匂いがすんな？」

「ん？ ああ、コロツケを揚げていたからその匂いではないだろうか」

大志が満面に笑みを浮かべて口端には涎を垂らす。和良は意図したわけではないが、偶然にもコロツケは大志の大好物だった。大志は「うっひょおお！」と歓喜の声を上げると部屋に入ろうとして、真理奈にそれを妨害される。

玄関に立ち塞がっている真理奈を、不審そうに大志は睨んだ。

「どういつつもりだ、マリ？ オレのジャマすんじゃねえよ」

怒気を孕ませて大志は言うが、真理奈は一步も引き下がらない。当然だった。大志本人は気付いていないが、先ほど歓喜の声を上げると同時に両手を振り上げた大志のタンクトップの肩が微妙に片方落ちていた。このままではポロリが有り得る。

万が一にも大志がポロリをして和良の目が眩んだらと思うと、真理奈は気が気ではなかった。

「服を直すまではコロツケは食わせん！」

「コロツケを食うまでは服なんか直さん！」

互いに一步も退くことなく竜虎相打つ。

虎と化した大志が四肢に力を込めてその発条により跳躍、噛み付くように真理奈へ踊りかかると、龍と化した真理奈は素早く旋回し

天へと昇る。空中で激突した両者は龍が先手を打って虎の腰にまき付きジャイアントスイングのように振り回す！

虎はその勢いから抜け出るために上体を腹筋の力で曲げると、腰から下を捻ってネジの要領で龍のまき付きをすり抜け、同時に前足で地面に着地すると前転して勢いを殺す。

初見は五分と五分、否、龍の体格を生かした攻撃は虎にとって脅威と成り得るのは充分にその実感として得ていた。しかしそれでも譲れないもの《コロツケ》がある。

大志は鶴の構えをした。その雰囲気が変わったことを逸早く察した真理奈が警戒心から身構えるが、それこそが大志の狡猾な罠だった。野生は時として獲物を捕らえる為に狡知に長けることを、真理奈は思い知る。

「あっちむいてはい！！」

大志の右手の動きから自分の右側を指すと瞬時に判断した真理奈は咄嗟に左を向く。そうして右側を一陣の風がすり抜けた。

真理奈は自分の敗北に打ち震えるのがつくりと両膝を地面に付く勝負に勝って試合に負けた女の姿だったが、それ以前に真理奈が服を直せば良かっただけのことには気付かないことこそ、真理奈が真理奈たる所以だった。

「敗者はただ去るのみ……………」

意味深な言葉を吐き残してどこへともなく真理奈が消えた後、大志の朝食が終わるのを待ってから和良は話を始めることにした。

「今日から書道を教えてもらうことになってるけど、道具をまだ準備できてなくて……………」

「ん？ 道具なら別にオレのを使えよ。どうせどんな道具を使ったって、よつぱど壊れてない限り大差ねえんだから」

満腹になったお腹をさすりながら大志が笑う。

「いやでも、道具は消耗品だし、なるべく自分で取り揃えようと思うん——」

「カズもいちいち細けーことに気にすんなよ。オレだってこーして飯食わせてもらってんだし、交換交換」

まるで取り合わない大志に和良も渋々承諾して、せめて来週までにはちゃんと道具を準備しようとして心に誓う。

食器を片付けて洗うと、真理奈の分のコロッケを油取りしていたクッキングペーパーの上から皿に移し、ラップをして冷蔵庫に入れる。きつと真理奈なら気付いてくれるだろうが、念の為にテーブルの上に書置きも残してから大志の部屋へと向かう。

カードキーは相部屋ということで昨日もう一枚を合鍵として発行してもらっていたので二枚あるが、部屋を出て行った真理奈がカードキーを持っていったに多少の不安を覚えた。

和良は二枚ともカードキーを抜くと、真理奈に大志の部屋にいる旨のメールを送る。それでなくとも今日は書道を教えてもらうと決めていたので、メールを見なくとも分かるだろうが念の為だ。

「準備できたか？」

「うん、それじゃよろしく」

「おう！」

大志の部屋に二人で入る。昨日も入って掃除や洗濯をしたばかりだが、今日見てみると早速床には服が数枚乱暴に捨てられていた。見覚えがあるそれらを拾うと、昨日大志が着ていた服だった。

「もしかしてお風呂入る前に部屋で脱いでる？」

「ん？ 普通そうなんじゃねーの？」

何を馬鹿なことを？ といった態で聞き返す大志に和良は苦笑すると、黙って服を拾うことにしたが、何かさらさらの生地を掴んだ。シャツかな、と思っただけ見れば、スパッツだった。スパッツは洗濯

機が使えないので手もみ洗いをしなければならぬのだが、昨日も十枚近く洗ったばかりなので今日はいいかと妥協する。

「そう言えば昨日洗濯してて思ったけど、タイシはパンツを自分で洗ってるんだよね？」

「は？ パンツ？」

心底不思議そうな顔で尋ねてくる大志に、和良は一瞬固まった。

自然に床に放り投げられている上に男の自分がこうして手に取っても大志がそれを気にする様子が無いので、スパッツは短パンからはみ出るパンツを隠すために穿いてるとばかり思っていた。しかし、大志の一言によって和良は別の可能性に気付いてしまった。

…………… 本来、スパッツは下着だ。つまり、大志はそれをそのままの意味で着用しているのでは？

手に持っていたスパッツを見て、まさか、と思い直す。あまりこのことは深く考えないことにした。

衣服を洗濯籠の中に入れると、大志に呼ばれて奥の部屋へと入る。つん、と墨独特の新聞紙のような香りが充満していた。

壁には三枚ほど作品が張られており、それぞれ『永』、『生徳』、『桜』と楷書で認められていた。

和良がそれらを見ていると、大志は部屋の手前にある足の短いテーブルに座って、自分の隣を和良に勧める。

「まず書道に必要な道具は初学者なら毛筆と半紙と墨と硯。これだけ。筆には四徳があつて、それぞれ尖・斉・円・健と呼ばれる筆の状態な。尖は字面通りに筆先が尖っていること。これは鉛筆でも言えんな。先つちよが丸かったりしたら字が書き辛いだろ。斉は筆の穂先が揃っていること。使い込んでいると一本や二本アホ毛みたいに飛び出すが、そいつはもう寿命だから使うの止める。んで、円は筆の腹んところが丸くなっていること。割れていたりしたらそいつも寿命。捨てる。終いに健。筆に弾力があること。腰のことだな。以上」

実際に毛筆を片手に説明する大志に相槌を打ちながら聞いていた

が、ふと疑問に思った。

「墨を抜き取る場合はどうすればいいの？」

「例えばオレが使ってるこの筆は穂が固めてあるから水でちょいちょいと漱いで最後に半紙で揉まずに……うーんと、こう、柔らかく！」

手に半紙を持って押え過ぎず、かといって力を抜き過ぎずに水分を拭う。虫を潰さないように持つくらいの力だろうか、と和良は思う。

それほど力を入れずとも半紙が勝手に水分を吸収してくれるので揉む必要は無く、そっと押すだけで充分に水分は吸い取ることができていた。

「逆に穂を固めていない筆は根元まで、黒い部分が無くなるくらいしつかり洗わないとダメだぜ。そうしないと筆が割れて使えなくなっからな」

和良が頷いたのを見て、大志は筆を置く。筆に関する説明はこれで終わりだった。次に墨汁のボトルを手取る。

「墨汁は安いやつでも何でもいい。たまに薄い墨汁も売られてたりすつけど、そういう場合は硯を擦れば濃くなっし、ひらがなを書くなら薄い方が味が出たりする場合もある。んで……紙は半紙で基本的には間に合う。よっぽどのがねー限りは、全紙っていう一番大きな紙やその半分の半切りは使わねーだろ。オレでさえまだ使ったこたねーし」

へえー、と頷くが、和良には全紙などがどれくらい大きいかはまったく分からない。全紙は幅七十センチに高さ百四十センチであるのに対して、半紙はたったの二十四センチ×三十三センチしかない。およそ四分の一のサイズだ。

更に半紙にも機械漉きと改良半紙の二種類が存在するが、改良半紙の方が墨による滲みが少なく美しく仕上がるので好んで使う人は多い。それでも初学者ならば最初は筆につける墨の量などを体得する意味で機械漉きの方がいいかもしれない。

そうしてそれらの説明を終えた大志が、最後に円硯と呼ばれる円形の硯を手にする。

丁重に扱ったためかわざわざ両手で持ち、それを和良へと手渡す。

「それ端溪石つつー中国の石でできた八千円の硯な」

「えええええ！？」

「ウソだけどな」

「えええええ！？」

腹を抱えて笑う大志を本気で睨みつつ、和良は硯をテーブルへと戻す。

「硯は何でもいいぜ。プラスチックのでもいいしな。使いりゃなんだっていんだよ、書道は」

硯に墨汁を垂らし、筆を手に取ると穂先に液を滲ませる。

下敷きの上に半紙を乗せて、道端に落ちていそうな小石を文鎮代わりに置くと、姿勢を正して半紙に向き合う。

最初に斜めに入った一画目に続けて二画目もすらすらと書き、下まで筆を下ろすと撥ねる。そして少し間を置いてから三画目を書き、最後に四画目と五画目を書く。『永』という字が完成する。

そうして筆を置くと、指を動かして一画ずつ指してゆく。

「一画目は側と言って点のこと。次に二画目の最初が勒といって横線、下に下ろせば努といって縦線、ここで最後に撥ねさせて？。ここで呼吸を置いて、三画目の最初が斜めに上がる横線で策、長い左払いが掠。四画目の短い左払いが啄。最後の五画目にいって、右払いが磔。この永字八法が習字の基礎にして修めないといけない技術」
即ち、基本。

「習字の楷書ではこれを重視してくから、今日は手始めにこの『永』の字をオレが良しというまでひたすら書き取りな」

「その前にどうしても試したいことがあるから、こっちのまだ使っていない筆を借りてもいい？」

「ん？ ああ、いいぜ」

首を捻りながら大志が筆を渡すと、和良はその首筋をつーとな

ぞる。

「ひ、や、め、ろ、よ、お」

「やっぱりそうなるよね。安心した」

背筋を伸ばして震えながら言う大志に和良は筆を返したが、当然ながら大志は烈火の如く怒った双眸を和良に向ける。

「何すんだよ!？」

「うんと、これには深い事情があつて……、中学校の時にマリちゃんがクラスメイトの女子にイタズラで同じことされたんだけど、まったく何にも反応が無かったから」

「不感症なんじゃねーの？」

「言葉の意味を知つてて使つてる？」

「さあ？」

黙々と『永』の字を和良は書き続けていたが、次第に大志も熱が入ってきて書いている途中でもダメなところを指摘するようになっていた。

酷い時では一画目の点が撥ねたという理由で書き直しと言われた。それでも和良はめげずに、一画、一画を大切に書いてゆく。

最初に点を書くと、次に流れるように筆を運んで少し斜め下に筆を持つてくると、ぴたりと筆を付けて半紙に墨を馴染ませる。そうして右に水平に筆を運び、筆の尻を旋回させると垂直に落とす。最後にぐつと力を入れて、撥ねる瞬間に力を抜く。ここまでは何度書いても同じように書くことができるようになっていた。

問題は次だった。筆を撥ねさせて一旦離れた筆を、この三画目までの全体のバランスを見ながら再び紙に置かなければならないのだが、その位置が未だに上手く掴めない。そこで既に三十回近く引つ

掛かっていた。大志曰く、間架結構法と呼ばれるこの全体のバランスを考えて書くことは、楷書にとって大事な造型らしい。

余韻を残しつつ考え事をしていたためか少し行き過ぎたと思い、慌てて和良は筆を僅かに戻して紙に置いた。隣からは何も指摘が飛んでこなかった。

安心して次に進み、三画目の左払いを終わらせ、墨が薄くなってきたことに気付いて硯で筆を湿らせる。

心持ちゆったりと構えながら四画目に入り、そうして遂に五画目に入る。通算五十三枚目にして、ようやくここまで来れたのだと実感する。その心の感動が体に現れたのか、手が震える。

五画目を書き切って右に払った時、筆に湿らせた墨がぴつと飛んだ。墨は見事に大志の短パンに着地し、そこに黒い斑点を作る。

「お？」

「あ、ごめん、タイシ。すぐに洗うから洗濯籠に入れておいてくれるかな？」

「おお、分かった」

和良が文鎮代わりの小石を寄せて完成した半紙を部屋の奥に広げられている新聞紙に挟めていると、

「カズー、オレのスパッツ知んねー？」

リビングから大志が尋ねてくる。昨日洗ったのはまだ乾いていないのだろうかと思ったが、かといって昨日穿いた洗濯籠に入ってるスパッツを使うわけにもいくまい。

パンツを穿いてもらう。そう思い口を開く。

「洗濯するから、別のパンツか何か穿いてくれないかな？」

「は？ オレ、パンツなんて持ってねーよ？」

まさかのカミングアウトに和良は狼狽してしまうが、それでは今日は短パンの下に何を穿いているのかと考え思考が停止した。

短パンを脱いでスパッツを探したということはその下にスパッツは無い。そしてスパッツの下に穿くパンツも持っていない。導き出される結論はたった一つだ。

「なー、カズー……」

足音が近い。声もドアの向こう側から聞こえた気がする。ドアのノブに手がかけられ回った。動悸が激しくなり目を瞑るが、ドアは無情にもキイイと音を立てて開く。それが余計に動悸を早めさせる。「結局このまんま着た」

見れば、スカートの裾にラインが入ったパーカーワンピースを着ていた。それに安心した和良がほっと一安心する。

なぜ和良がほっと安堵したのか分からない大志は頭にクエスチョンマークを浮かべるが、特に気にしないことにした。

それよりも、最後に和良が書いていた書の方が今は気になって仕方が無かった。和良の隣に並んで屈むと、新聞紙に挟んでいた半紙を順番に見ていく。

五十三枚の軌跡を順番に見ていき、そして最後の一枚を見た大志は満面の笑みを浮かべた。それに和良もようやく合格したのだと思いき笑顔になる。

「惜しいな！」

最後の右払いが力を込められずにそのまま流れてしまっていた。

通算六十二枚目にしてようやく大志は合格を言い渡した。和良は半紙を新聞紙に挟むと、んー、と背伸びをする。

「それじゃこれから片付けのレクチャーを始めんぞ」

「はい！」

元気良く答える和良に驚きながらも、大志は硯と筆を手に取り、未使用の半紙を一枚だけ持って洗面所へと向かう。

まず蛇口を捻って水を出した大志はそれに筆を打たせて、後はその筆を半紙で包むと脇に置く。

そして硯を持つと、こちらは先ほどと異なり丁寧に洗い出した。

「硯はできれば綺麗に洗った方がいいな。洗わなくてもそれでどうなるもんでもねーけど、気分的にな」

そう言っ硯を洗う大志を見ながら、和良は優しく笑った。

「スパッツもちゃんとそうやって綺麗に洗ってね、自分で」
「うつ！？」

（その後）

部屋に帰ってきた真理奈が最初に目撃したのはコロツケを揚げている和良とそれをできた順に食べている大志だった。

「なぜ晩ご飯までお世話になってるのだ、タイシ？」

「教えんのに夢中で気が付いたら四時過ぎてたからよ、ついでに力ズに作ってもらった」

おいしそうに食べる大志を見て、一つ真理奈は気になったことがあった。朝に見た大志の格好はタンクトップに短パンだったはずだ。なぜワンピースに着替えているのだろうか？

邪推する真理奈は頬を歪める。

「朝と服が変わってるようだが？」

カレーコロツケを口に頬張っていた大志がそれに頷く。

「カズが張り切ってオレの服に液を飛ばしたから着替えるハメになっちまったよ」

「カズくんのバカ——ッ！！」

「マリちゃん！？」

明後日の方向へ全力疾走する真理奈を、この後和良は懸命に追いかけるのだった。

【悩む女】

お風呂を上がってタオルを体と髪に巻いた美弥は、昨日買ったばかりの新品の体重計に浮き浮きしながら乗る。

デジタル数字が音を立てて画面に表示された。二キロ増。その数値を見て美弥はごしごしと自分の目を拭いてもう一度見る。二キロ増。

次にバスタオルを取って乗ってみる。一・八キロ増。試しにバスタオルだけを乗せると、0・三キロ増。0・一キロはどこに消えたのか？ 謎である。

「にや……にやんで、にやんで太ってるのおー!？」

悲愴な叫びをして、服を着る。お腹周りを気にしながらも靴を履いて外に出ると、九時を過ぎた夜に半月が浮いていた。

F号室のインターホンを鳴らして待っていると、すぐにダークブルーのナイトシャツを着た真理奈がドアから現れた。

「こんな夜にどうしたんだい？ ミイ」

「一日で痩せる方法教えて！」

「毎朝必ずトイレに行くことだな」

出せば減る。当たり前のことにも関わらず、なぜか自信満々に言う真理奈に愛想を尽かした美弥は別の人を頼ることにした。

「じゃあね」

手を振る美弥を、腑に落ちない真理奈が手を掴んで引き止めた。

「なぜ？」

「そんな生理機能に頼った方法じゃなくて、一夜で効果が出そうなダイエット方法を聞いているの」

「ミイはん、ダイエットしとはるん？」

声に気付いて二人が見ると、玄関先にタツパを持った紗和と、その後ろに咲が立っていた。四人は互いにこんばんはと挨拶するが、紗和だけはおぼんとすと挨拶をした。

「おぼんとすとは夜ですという意味になるが、京都の人が夜に挨拶をする時にわざわざ夜ですというのは変じゃないだろうか？」

文化的な解釈ではなく言語的な解釈をする真理奈に、一同も思わず確かにと思ってしまう。

「そやけどなあ、こんばんわも京都では大多数の人がつこうてはる

よ。年配の人がたま〜に使うくらいです」

「年配……」

「さっちいの方が上どすえ？」

下級生二人の反応に注意する紗和を見ながら、本題からそれてしまっていることを咲は紗和が持つているタツパを指差すことで教える。

それに気付いた紗和が慌ててタツパを真理奈に差し出した。

「これなあ、京都の実家から届いたお漬物どす。多かつたさかいお裾分けします」

「これはどうも。京野菜の漬物ならさぞ美味しいだろう」

喜んで真理奈はタツパを受け取ると、上級生二人はそれじゃと帰りかける。

「あ、待つて」

美弥が不意に呼び止めるので、二人が振り返ると、切実な顔をしてこちらを見ていた。何か困りごとでもあるのだろうか、二人は改めて美弥と向かい合う。

「どないしはったのお？」

「えつとね、二人は何かダイエットとかしてるう？」

「さつきもそないな話しとったねえ、そう言えば。ダイエットどすか……うゝん、あてはお肉はなるべく食べとりまへんなあ。そのまんま脂肪になりはるし」

「既にある脂肪を落としたい場合は？」

更に尋ねてくる美弥に、後ろから咲が出てその胸を掴んだ。ひわっ！？ と美弥が驚く。

「C」

小さく呟いた咲に美弥が目丸くする。まさしくその通りだった。それを見ていた紗和がおかしそうに笑う。

「さっちいなあ、増えたんは胸やあらへんのかて言いたいんよねえ？」

「うん」

咲の同意に悩む美弥はそうかなあ？ と自分の胸を揉むが、そんな気もしないことはないのにっこりと笑う。

「そう思うとなんか自信に溢れてきたよ！」

満足気に笑った美弥が誇らしげに胸を張ると、咲は今度は紗和の胸を掴んだ。

「ひゃわんっ！？」

「F」

がつくりと地面に膝を付けて意気消沈した美弥を紗和が慰める横で、自分の胸を触って確かめる真理奈を見た咲がその胸を掴むと、ぴしりと固まった。

それに気付いた二人が不思議そうにそれを見遣る。

「Dなのに、ブラをしてない」

「ホンマあ！？」

「何でブラをしてないのにそんな形がいいの！？」

三人はそのことに驚愕を隠せない。真理奈はそれに微笑を浮かべた。

「カズくんへの想いがはちきれんばかりに詰まってるからな」

三人は凍りながら、それ以上は何も言えず泣く泣く自室へと戻っていった。

（その後）

部屋に戻った咲は、男子と同じく欠片も膨らんでいない自分の胸を育てるべく今日も牛乳を飲むのであった。

は？ パンツ？（後書き）

紗和と咲と美弥が学校の授業で出せなかったので夜の部として【悩む女】を追加。

年上の女・前編（前書き）

上級生二人のお稽古。チャプターは同じですが、物語内の日付を跨ぐ関係で前編と後編に分割。

年上の女・前編

紗和の部屋は京畳で六畳のゆったりとした空間だった。壁には川に集う鹿の水墨画と、淡いピンク色の房のような花弁を付けた馬酔木を、信楽焼きの花器である古信楽尺八という花入れに飾り付けていた。

その空間はそれらにより春の小川が彷彿とされる。和良と真理奈と美弥はそこに正座して黙っていた。真理奈だけは幼少時に茶道の手ほどきを受けていたこともあって悠然と構えていたが、他の二人は緊張からそわそわと落ち着きがない。

やがて紗和が襖を開いてお辞儀をすると、返すように真理奈もお辞儀をする。それを見ていた他の二人も慌てて見様見真似でそれに続いたが、本来ここでは上座に座る正客——真理奈だけが礼をすればよかった。しかし二人が初めてであるので紗和と真理奈は敢えてそのことを指摘するのは避けた。

紗和は部屋に入って釜の隣に座ると、三人に向かって三つ指を突く。

「本日は生憎にも外は雨ですが、せめて皆はんの心がはんなりと過ごせるよう努めさせていただきます。どうぞ、ゆるりとお過ごしおくないやす」

最後に礼をして部屋から下がると、次に水色の線が入った緑色の羊羹を織部菓子器に載せて紗和が出てくる。菓子器には懷紙と呼ばれるお菓子を載せるための和紙も載っていた。

正客である真理奈の前に菓子器を置くと、菓子器の正面を真理奈に向けてから礼をして下がる。

和良はその一連の流れをつぶさに観察してはいるが、沈黙が重い。紗和は最初に水差しを運んできて正面に置く。そうしてまた部屋から下がり、今度は右手に棗と呼ばれるお抹茶が入った器と、左手に茶杓が乗せられた茶碗を持って入ってくる。先ほど置いた水差し

を頂点にしてそれらが三角形を結ぶように配置すると、繰り返し部屋から下がる。

置かれた茶碗の中には茶巾と呼ばれる茶碗を拭く為の布巾と茶筌が仕掛けられており、和良の位置からもそれが見えた。

そうして最後に建水と呼ばれる使った水を捨てる為の器に柄杓を載せて部屋に入り、振り返って建水を正面に置くと、襖を閉めてから建水を持ち直して再び立ち上がる。

ゆったりと畳を進み、釜と水差しのちょうど中間が正面になるように座ると、建水を左手側の奥に置く。そうして柄杓を少し持ち上げると、建水の中に入れてきた蓋置という蓋を置く為の支えを取り出し、柄杓を建水にまた置くと蓋置を建水と釜の中間に置く。

「カズくん、次に総礼があるから、しっかりと心の準備をしておくんだぞ」

「うん」

紗和は建水から柄杓を取ってそのまま蓋置に載せると、果たして真理奈の言う通り指の先を畳に付けて軽く腰を曲げる。三人も予め真理奈が指示していたこともあって流暢にそれに返礼する。

ようやく準備が終わり、建水を進めると、紗和は茶碗を右手で取って左手に持ち直すと、右手で持って自分の前に置く。そうして棗を取り、今度は茶碗と自分の間に置く。

腰帯に挟んでいる帛紗を三つ折りにして取ると、それを手で広げて垂らし、左手で扱いて右手で折り畳むと、挟まっている左手を抜いて右手で持つ。

「帛紗さばきをしている女性の指に視線が行ってしまうのは性だろうか」

「マリちゃんってたまに訳の分からないことを言い出すよね」

「みいいゝ、足痛いよあゝ……」

三者三様の反応に紗和はつい微笑んでしまう。

「ミイはん、足がお辛いんやったら崩して女の子座りしてもかまへんよ？ カズはんも痛くなる前にあぐら掻いても大丈夫やし」

美弥はうう……、と呻きながら足を崩したが、和良は特に足を崩すでもなく平然と座っていた。元々、実家では食事中に正座をして食べていた為に少しくらいなら正座でいてもすぐに痺れるような事は無い。

真理奈はその様子を見ながら、さりげなく足の指を曲げて足の痺れを回避していた。美弥のように足を崩したいところだが、紗和の手前そういうわけにもいかなかった。

紗和は空いている左手で棗を取ると、帛紗で蓋の横を『こ』の字を書くようにして拭く。そうして茶碗があつた位置に棗を戻すと、茶碗の上にある茶杓を取る。

それも帛紗で拭いて清めると棗の上に置き、帛紗を建水の前に置く。そこで一息吐くと、三人の様子を窺った。

真理奈は表面上は泰然とした表情で座っているが、和良と美弥は精神的に疲れていそうだった。さすがに初めての茶会で緊張してしまつたのだろうか。

紗和は気を紛らわせるために自分から話題を振ることにした。

「ミイはんはもう授業には慣れたですか？」

「えー？ ぼちぼちでんなあ」

三人が一齐に『そこでなぜ関西語を使うんだろう？』と疑問に思いはしたが、敢えて気にしないことにした。きっと茶会では関西語を使うというルールがあるのだろう。普通は無いが。この空間においては特別にそれを認めてもいいような気がした。

点前を続行しながら、その暗黙のルールを破りそうな和良に紗和は目を付ける。既にこの場は弱肉強食の世界と化していた。

「そおやの？ せやけどなんや寮にいなはるときは楽しそうやねえ？ カズはんもそう思わん？」

明確な悪意の意思が見えていたが、和良もそこまで愚鈍ではないので笑顔で応える。

「えっと、ワイもそう思うで」

「カズくんの関西弁ええなあ……」

うつとりとする真理奈は無視して、更に状況を把握した美弥もそれに乗じることにした。一体この面子は何をしたいのか自分たち自身分からなくなってきたいるが、楽しいと言えば楽しいのだろうか。「ほんにいい？ ミイはそんなつもりあらへんかったけどお、たぶんカズにいちゃんがいるだけでミイは楽しいでえ」

「カズはんはモテモテやねえ」

「そうやあ……せやから、うちそればかりが心配やん？ カズくんこん通りの色男やし変な女付き纏ったら思うと夜もおちおち寝れへんわ」

まさしく付き纏っている女が自分自身だと気付いていないのだから、と美弥は内心で黒い衝動を吐き出したくなったが喉元で止めた。さすがにこれを言ったら全面戦争に発展しかねない。紗和はそんな真理奈を見ながら恋は盲目という名言を思い出し、その様子を可愛らしく思う。

「でも、中学でも高校でもマリちゃんの方がすごくモテたよね。男女両方に」

人気という意味で解釈した和良を三人は見つめながら、同時に右手でアウトのサインを出した。最初に関西語を使わなかったのはやはり和良だった。

「ブー、罰ゲームはカズおにいちゃん！」

美弥が言い出し、他の二人もそれに賛同する。急に罰ゲームを設定されて和良は困惑するが、空氣的にはそれに逆らうことはできそうになかった。

紗和は棗の蓋を取って右横に置くと、茶杓でお抹茶を掬って茶碗に入れながら、思いついた罰ゲームを提案してみよう。

「じゃあな、この三人のそれぞれ好きなところと嫌なところを一つずつ挙げるんはどお？」

「あ、それいいー！」

「微妙にうちの罰ゲームちゃうん？ それ」

好きなところはともかくとして嫌いなところまでを挙げてもらう

のはどうか、と真理奈は思ったが、紗和は首を振る。

「カズはんにとってイヤなことを減らせるっちゅうことは好きなところを一個増やせるっちゅうことどすえ」

「ほなその罰ゲームで」

あっさりと納得した真理奈が和良に向き直る。和良はそれに困りながらも、それぞれ考えてみることにした。

「マリちゃんの好きなところは………耳かな」

「カズおにいちゃん、それ好きな部分！」

それでも嬉しそうに顔を赤らめる真理奈を紗和はいじらしく思いながら、嫌いなところも尋ねることにする。

「そんで、イヤなところは？」

「うーん、マリちゃんは長髪より肩あたりまでの方が似合うよね」

「うち今からエクステ取りに美容室行くわ」

立ち上がろうとする真理奈を慌てて和良と美弥が押し止めたが、それでも本人は席に戻るとやたらと髪を弄り始めた。

その傍らで美弥が今度は和良の肩を叩く。

「何？」

「次はミイの好きなところと嫌いなところ！」

言って！ とせがむ美弥に和良は苦笑してしまう。それを知りたがる女の子の気持ちが男にはなかなか理解できないものがあつた。

それでも真剣に考えて答える。

「——ミイちゃんの声は好きかな。あと細い腕？ 嫌いなところはマニキュアかな」

「これはネイルアートだもん！！」

必死に美弥は弁明するが、和良にとってはマニキュアもネイルアートも同じだった。要するに爪を飾り立てたり伸ばしたりするのが嫌なので、特にそこに違いは無い。

真理奈はニヤニヤと笑うが、紗和は笑っていない目で美弥を見ると、

「茶室ではネイルアートやイヤリング全般はお断りて、昨日あれほ

どゆったよね？」

鬼気迫る形相で睨んでくる。この後、見事に美弥は茶室を追い出されるのであった。ちなみに茶室は携帯電話と腕時計、指輪、その他一切の金属類は持ち込み禁止である。

お菓子とお茶を二人が頂いた後、茶碗を清めて仕舞いの手順を踏んだ紗和が最後の挨拶の為に二人の正面で座った。

その前には、拝見のための茶碗と茶杓、棗が置かれている。

紗和が礼をすると、応じて二人も礼をした。

「そやつたらこれにて本日の茶会は終わりとさせていただきます。

何か質問があればどうぞ」

すると、真理奈が手を付いてややお辞儀をする。

「本日は大変結構なお点前に快く過ごさせていただきましたが、どのような趣向でお招きいただいたのでしょうか？」

「まず、春ということで麗らかな小川を考えてお道具を用意させていただきました。茶碗は野々村仁清のしだれ桜、床の間に飾っている水墨画は横葉芸能専門女学院絵画科水墨コース二年生の藤咲久梨はんに頂いた小川、花は小川ということで山間部に自生しなはる馬酔木を用意させていただきました。春の穏やかな小川を歩くようにその心が和めば幸いです」

「なるほど。確かに小川のさらさらとした音がどことなく聞こえてくるような……」

「雨の音じゃないかな？」

和良を見ながら二人は納得したように頷く。確かに雨足は最初より強くなり、屋根を叩く音が強くなっている。窓の外では鈍色の曇天が広がり、目に見えて天気は悪かった。

それでも、心なしかこの茶会の席では雨を気にすることなくお茶を楽しめた気はする。

「ところで、先ほどの和菓子は大変綺麗でおいしかったのですが、謹製はこのものでしょう？」

「あれも横葉芸能専門女学院の和菓子学科練り菓子専攻を昨年卒業しはった逸早吉乃はんに、今日のため作っていたいだいた特別なもので、銘は伊豆どす。伊豆を訪れた際の緑溢れる景色を表現したそうどす」

紗和の説明に感服した真理奈は礼をした。それを見た紗和は、何か質問はないかと促すために和良を見るが、初めての経験で緊張しているのか、和良は黙って正座をしていた。その表情はやはり硬い。その様を初々しく思いながら、紗和は最後に礼をする。

「以上を持ちまして拝見も終わりとさせて頂きます。長い時間、ようもお疲れさんでしたなあ」

「こちらこそ今日は大変勉強になった。礼を言おう」

応じて真理奈が答えるが、肝心の和良は固まってぎこちなかった。一息吐いた紗和は、拝見のために出していた棗を持って部屋から下がる、四角い赤色の帛紗挟みを持ってまた入ってくる。そうして今度は和良の正面まで進んで座った。

「今日は初回ということでこれにて稽古は終わりにするんやけど、次回からは本格的に始めるから必要なお道具を来週までに取り揃えておくんなし」

「はい」

頷く和良の前に、帛紗挟みの中から懷紙と帛紗、それに出帛紗と菓子切り、扇子を広げる。

最後に帛紗挟みを置いて、計六点が並ぶ。

「全部で九千円くらいやと思うんやけど、これだけは使い回しがきこへんから自分で揃えてな？」

「はい」

真剣にそれらを見ながら覚えようとする和良に、その横で真理

奈が笑う。

「いや、私が付いて行つてどれを買わなければならないか言つから無理に覚える必要はないぞ」

「うん、ありがとう。でも一応覚えれるだけ覚えておくよ」

「せやねえ。お道具はどれも使つし、覚えておいて損は無いなあ」

和良はおもむろに扇子を取ると、それをしげしげと眺める。頭の中で連想されるのは棋士や社長が自分を扇ぐために用いている姿だった。

茶道でも自分を扇ぐためにあるのだろうか？

「扇子はなあ、お客さんの時は使わんのやけど、お稽古では挨拶の時や床の間を拝見するときにつこてはるんよ。そやから、広げて使つわけやあらへんけど、欠かせない儀式の道具やす」

「ちなみに私はマイ・センスを持っているぞ！」

ポケットから真理奈が扇子を出して広げると、そこにはなぜか和良の写真が貼られていた。

肖像権の侵害以前に、いつ撮影したかすら定かではない、中学時代の運動会での自分の姿がそこにはあった。

和良と紗和は何も言えず、自信満々な真理奈を呆然と見つめるばかりであつた。

紗和の部屋を出ると、リビングには咲が黙々とソファの上で読書に耽つていた。咲は眼鏡をかけ、部屋着でゆつたりとした服を着ている。

「あれえ？ さつちいはもう今日の授業終わったですか？」

「うん」

本から目を逸らさずに頷いた咲を見ながら、紗和はキッチンに入つて割烹着を着用する。まな板を流しに置くと、煮付けに使うサバをさつと水で洗い、頭を切り落としてから三枚におろしてゆく。

その横で和良もほうれん草と豆腐、にんじんを切ると、フライパ

ンに油を熱してほうれん草とにんじんを炒める。野菜に火が通ったら豆腐を加え、そこに軽くこしょうを振って自分たちの部屋から持ってきた中華スープの素を入れると、更に料理酒と水も加える。

一度煮立たせたら水溶き片栗粉を入れてとろみを出し、最後にごま油を混ぜたら飾りに三つ葉を散らす。菜羹の完成だった。

一方、サバの味噌煮を作っていた紗和もあとは煮立たせるだけであり、すぐに晩ご飯の支度はできそうだった。

「明日はいよいよ弓道だが、最初は見取り稽古か？」

ソファに同じくかけた真理奈は、咲を見ながら尋ねた。咲は読んでいた本をテーブルに置くと、断るように首を振る。

「ゴム弓」

「いきなりか？ 一年掛けてじっくりとやっても射法八節まで身に付けることは難しくないと思うが……」

「素養次第。ダメなら見取り稽古」

なかなかのスパルタ振りに真理奈は驚きながらも、先生として一任している以上は方針も咲に任せることにしたが、今週はなるべく稽古を見ていて全体的にまず芸の雰囲気慣れる練習が多く、いきなり実践的な練習をする稽古は弓道だけだ。

特に弓道は弓を扱う手前他の稽古よりも危険性が高く、基礎をしっかりと身に付けてから安全に練習をさせた方がいいのではとも、真理奈は思う。

しかし咲はその点において譲るつもりはないらしく、再び本を手にとるとそれを読み始める。

ふと、真理奈は咲が眼鏡をかけていることが気になった。この六人の中で普段から眼鏡を掛けているのは和良だけだが、どうやら咲もたまに眼鏡を掛けるようだ。

「軽度の近視なのか？」

真理奈の問いに振り向いた咲が、眼鏡を少し下にずらす。

「伊達」

「伊達？ ではファッションで掛けているのか？」

「見えてはいけないものを見ない為」

無表情に言ってくる咲に背筋がぞわつと震え、真理奈は苦笑する。まさか、そんなものいるはずがない。

そうとは思うが、眼鏡を少しずらした咲がじつとこちらを見てくるので無性に気になる。聞きたくはないが、どうしても気になる。

「……どうか、したのか？」

「肩、凝る？」

咲の質問の意図が分からず釈然としないものの、真理奈はそれに頷く。最近、妙に肩が張って痛いのだ。もしかしたら何か霊的なものが関係あるのだろうか。

まさか、と否定しているはずなのに、真理奈は胸中で胸騒ぎがして咲の瞳をじつと見る。黒い目には自分の顔が映り込んでいた。

「赤ちゃんがおぶさってる」

「はっはっはっは、まさか」

笑いながら真理奈はソファから立ち上がると、茶碗にご飯をよそっていた紗和の和服の袖を引っ張ってトイレへと向かう。

そのまま紗和をトイレに連れ込んだ真理奈はなかなかトイレから出て来ようとしなかった。

疑問に思った和良は先ほどまで話していた咲に何があったのか聞いてみるが、咲は眼鏡を掛け直して肩を竦めるばかりであった。

年上の女・後編

翌朝。インターホンが鳴ったので和良が玄関へ行き鍵を開けるとドアの前には咲が立っていた。

白筒袖に袖を通して帯をし、黒袴を着用した一般的な弓道衣の出で立ちだった。手にはカーキ色の手提げ鞆を持っている。

「着替える」

差し出された鞆を和良が受け取って見ると、中には同じく弓道衣が入っていた。

「これはさっちいを買ってきたの？ その、費用とか……」

「クリーニング」

咲の弓道衣をクリーニングに出してきたのかと和良は思ったが、実際に鞆から出してみると咲が着るには随分と大きく感じられた。恐らく他の人のものだろう。

「あ、先輩が着古したもの？」

咲がそれに頷いた。先輩に大きくなったら着るように貰ったのだろうが、咲の成長はその先輩が思っていたよりも芳しい成果を挙げなかったようだ。

自分が着替える間、咲を玄関に待たせるのは失礼なのでリビングに案内してオレンジジュースを出した。咲がソファにゆっくりとしているのを確認した和良は自分の部屋に行って鞆から弓道衣を取り出す。

鞆には白筒袖と袴、腰帯、それに白い足袋が入っていた。和良は服を脱いで胴衣を羽織って袴を穿くと、足袋を履いて腰帯を巻くが、どうにも違和感があった。腰帯がおかしい。

懸命に咲の姿を思い出して、腰帯が袴の上ではなく、胴衣の腰部分にあつたことに気付き、袴を脱いで腰帯を締める。袴を穿くとこれでいいのだろうかと思ひながらリビングへ行く。咲は出てきた和良をソファから見ながら指差してきた。

「死んでる」

「え？」

あまりにも咲が無表情に言うので、自分は幽霊だったのかと某第六感映画的な悟りに達するが、足を見ても消えてはいないので安心する。幽霊では無いようだ。

では死んでるとは何を指したのか？ 和良にはまったく分からない。

咲はソファから立つと和良の前へと進み、その雁字搦めの腰帯を解くと、右側が上になっている衿を左側を上にして正す。要するに、先ほどまでの着方では死に装束となっていたからだ。

それに気付いた和良が礼を言おうとした矢先、腰帯が力一杯ぎゅっと締め付けられ息が一瞬止まる。

「——さ、さっちい、キツイ……」

押し殺した声を何とか出すと、咲は頷きながらもそのままぐるぐると腰帯を巻いていく。和良の着方があまりにも杜撰であったために、自分が初回は着付けをすることにした。

帯を右回りに三周させると、最初に上に持っていた帯の端を巻いた帯の上から下にやり、それに巻き残しの端を重ねてクロスさせる。ちょうどリースツリーに飾るリボンのような形だ。

そこから、重ねた巻き残しの端を巻いた腰帯の上から通して引張り、両端を上下にぎゅっと引張った。再び和良は圧迫されて息苦しくなるが、懸命にそれに堪える。

最後に上にある端を腰帯の中を通して垂直に下ろすと腰帯は締め終わった。次は袴だ。

適当に後ろで蝶結びされている紐を解いて後ろで交叉させながらぐるりと腰を一周し、咲が体を和良の背中に密着させて体の前で両端を交叉させながら最初に巻いた紐の下を通す。

和良は咲の柔らかい体が密着することに意識が行ってしまい、気がではなかった。背中全体に神経が集中し、そのなだらかな感触にどぎまぎしてしまう。

咲はそうとも知らずに紐をまた後ろまで回し、体が自然と離れる。それでも和良の背中には咲が温もりが残っている気がした。

後ろに回した両端を花結びにすると、咲はそれを小さく纏めて下げていた帯に丸めこむと、それらを帯と体の間に巻き込む。最後に見た目を調整してヘラなどを帯の中に隠すと、馬子にも衣装といふべきか和良も少しは遅しく見える。

咲は内心でその完成度に満足しつつ、表面には無感動を装う。

「変じゃないかな？」

和良が心配そうに尋ねてくるので首を振った。確かに筋肉の無い体は道着を着ても着せられてる感が拭えないが、それでも普段よりは男らしく見えるから不思議だ。主に道着に対する日本人の先入観が大きいと思うが。

咲が否定するのでそれを信じた和良は、今日はもうこれだけでいいような気持ちも無いことはない。

「射場に行く」

咲が先導するようにリビングから歩き出したので、怠惰な心を戒めた和良が応えてそれに続く。

玄関を出るときに和良は壁のカードフォルダーからカードキーを抜き、外に出ようとしたところで咲が眉根を寄せて玄関に振り返ったので立ち止まった。

「マリ」

「……え？ ああ、マリちゃん？ 今日は美容室に朝から行ってるから午前中はいないよ」

こくりと頷いた咲は再び歩を進めるが、昨夜は自分のつまらない冗談で真理奈を酷く恐がらせたことを詫びようと思っていたこともあって僅かに残念に思った。

幽霊が時折暗い場所で見えるのは事実だが、あの眼鏡は伊達ではなく軽度の遠視用の眼鏡だと昨夜説明するのを忘れていたからだ。

ちなみに真理奈の背中にいる赤ん坊は真理奈に母性を感じるから憑いているのであり、甘えているだけだと説明するべきかどうかは

検討中だ。

昨夜のいざこざを知らない和良は黙って咲の後を付いていく。射場があるのは横葉芸能専門女学院の高層ビル十四階であり、予め咲からそこで稽古を行うことは聞いていた。

エレベータで降りてロビーを出ると、咲は携帯電話で横葉家敷地内に常駐しているタクシーを呼ぶ。

和良もその存在は真理奈から聞いていたが、実際に使うのは今日が初めてだった。なぜなら、六台しかないタクシーを横女の女子生徒を差し置いて男子の自分が使うのは気が引けたし、そもそも外出するのは日用品などの買い出しのときくらいなので、実質的に使う機会が無かったこともある。

今日は咲もいるのでたまに使うくらいならいいだろうと免罪符ではないが思う。車で十分近くかかる距離は女子には中々疲れるだろう。

そう思いながら寮の玄関の前でタクシーを待っていると、数分して咲が倒れた。忘れていたが、咲は貧血を起こし易い体質だった。

「さっちい!？」

慌てて介護のために咲の体を助け起こすが、二十キロの米袋と大差無い軽さに和良は愕然とする。

(もつと精のつくもの……そうだ、今度焼肉に行こう!)

そんなことを考えながら寮のロビーに戻ってソファに咲を寝かせた。

横葉芸能専門女学院の高層ビルは外見がガラスウォールと近代的だ。中は廊下に絵画を飾ったり、特殊な造形の壁時計や所々に黒電話などが置かれていた。

十四階までエレベータで上がった咲と和良は四角い回廊を進んで奥の射場に入る。中は高校や弓道の教室にある射場と変わらない広さであり、今日一日貸切というのは少し贅沢な気がした。

和良がそう思いながら射場を見回すと、奥に既に一人だけ先客がいた。

その女子生徒はポニーテールを赤いゴムで束ねており、薄く日焼けした小麦色の肌が特徴的だった。女子は相当集中しているのか、二人が入ってきたことに気付かずのだけを見据えている。

右手に持った矢を引き絞りながら、自然、肩より高い位置にあつた弓はちょうど矢が肩と水平な位置にまで下がり、同時に左手に持つ弓は的へ向かつて僅かに体から離れる。右腕は弦の張力に引かれて肘が上がる。

女子の動きが止まると、空気が止まったような錯覚を覚えた。否、空気だけではなく、時間も止まっているのかもしれない。

物音一つしない静謐の中で、女子の胸当てが小さく上下した。呼吸を図っているのか、規則正しい呼吸に合わせて瞬きを数回行う。

唇を小さく開けて息を吸い込んだかと思うと、唇をきゅっと引き締めて静止する。瞬間、鋭い音が部屋に響き、数秒後にこつんと的に当たる音がした。的場を見れば、的の中心から左下にずれた位置に矢は立っていた。

両腕を水平に伸ばしたままその状態を保っていた女子は、両腕を腰に戻して顔を正面に向けると、見学していた二人に気付いて目を丸くした。余程驚いたのか、姿勢を崩して後ろに数歩仰け反るようにながら下がる。

「1 p こじふ g y f t d r せあ w ! ?」

「落ち着いて」

咲の言葉に女子はガクガクと首を縦に振りながらも射場の奥、片隅へと逃げ込みぶるぶると体を震わせている。その光景はどこか恐がりなウサギを連想させる。

咲は女子のところまで歩くと、そのお尻をペシンと叩いた。

「ひゃうっ」

恐慌から回復したのか、女子はようやく何とか立ち上がり、今度は咲の両肩を掴んでその背中に隠れながら和良を見てきた。中腰で

怯える様はウサギそのものだった。

「こっちは小田和良。こっちは野暮リト」

「こんにちは。リトって漢字は何かな？」

和良は恐がらせないように穏やかな笑みで近付いたつもりだったが、リトは恐がって咲の肩を引っ張りながら後ろへとずり下がる。

咲は呆れたように鼻で息を抜きながら、和良に立ち止まるよう手で制止をかけた。

「ロシアと日本のハーフ。男性恐怖症」

ああ、ハーフなのかと納得した和良は、更に続く男性恐怖症で事態を把握した。人見知りではなく、自分の存在自体が彼女にとって恐怖なのだ。

リトと距離を離すと、和良は頭を下げた。

「その、ごめんね。男性恐怖症って知らなくて、悪い思いさせちゃったね……」

こくこくと咲の後ろでリトが頻りに頷くので微妙に傷付くが、男性恐怖症なのだから仕方あるまい。そういう可能性を考慮しなかった自分も悪いのだ。

和良は弓道場の入り口まで戻ると、咲がそれに続く。リトはそのまま射場の片隅に残った。

「ゴム弓」

咲が懷からゴムが付いている木の棒を二つ取り出した。一つを和良に渡すと、残った一つを左手に持って両足を揃える。

両肘を曲げ、両手を腰まで持ち上げると、咲は左足を広げてから右足を上げて後ろへと開く。体勢が整ったところで腹の前にゴム弓を持ち、右手でゴムを握る。

顔を左に向けると、両手を平行に保ちつつ肩の上まで両手を上げる。そこからは先ほどリトがやっていた動作と同じだった。

左腕を返して的回かい伸ばすと、右手に持ったゴムを引きながら弓が肩の位置まで下がる。

その状態を数秒維持するが、リトのそれよりも空気がピリピリと

痺れるような妙な緊張感があつた。それは咲が持っているのはゴム弓なんかではなく、本当に弓と矢ではないかと錯覚するほど鋭い気配が集中していたためであつた。

空気が俄かに凜いだ瞬間、ゴムが撥ねて空気を切り裂いた。

すぐにゴムは木の棒によって制止され下に垂れるが、咲の視線は依然としての射ている。

やがて両手を腰に付けると顔を正面に戻し、両足を揃える。そうして両手を自然に下ろした。

「終わり」

簡潔な実演を見せた咲は、今度は目で和良を促す。

「えっと、最初は的に向かつて横を向くの？」

和良の質問に咲は頷いた。体が的に向かつて垂直になるように立った和良は、両足を揃えてゴム弓を腹の前まで持つてくる。

「早過ぎ」

咲の手が和良の手を抑えて、腰骨のところまで止める。順番を途中抜かしていたことを思い出した和良は、頷いて左足を広げると、右足も後ろへと下げる。

そうしてゴム弓を腹の前まで持つてくると、今度は咲の手が自分の手を持つて臍の下まで持つていく。大体これくらいの位置ということだろうか。

和良は左手に持つているゴム弓のゴムを右手に持つと、それをなるべく力を入れないようにして肩まで持ち上げる。ここまで来れば二度も見ていたので頭の中では所作を覚えてはいる。

しかし実際にやろうとしてみると難しかった。まず、右手でゴムを引きながら両手を下ろすのだが、どこまで下ろせばいいのかわからず咲に指示してもらう。更にゴムがぎちぎちと張り詰めるほど強く引いているので右手がぶるぶると震える。リトや咲のようにぴたりと止まることができない。

そうして半ば弓の張力に負けるようにして右手を離すと、棒を持つていた左手の親指の付け根にバチンと当たった。

「~~~~~!!!!!!」

絶叫しそうになるのを必死に堪え、和良は右手で左の手首を必死に押さえる。

その後ろでは咲とリトも痛そうな顔で自分の左手を摩っていた。

「あれを経験すると右手が下に下がっちゃうよね!」

「……………」

リトの言葉にばつが悪そうに顔を逸らした咲が無言で頷いた。

(その後)

全部で何回自分の左手に当てたかは知らないが、左手は青紫色に腫れていた。

咲が持ってきた濡れタオルで冷やしながら、ふと和良はリトの方を振り向いた。なぜか自分が練習している間ずっと射場の片隅に蹲っていたのだ。

「リトさんは練習しないの?」

「あの、帰りたいんですけど、あなたが入り口にいて出られないです……………」

和良はようやく得心した。リトが帰るには自分の後ろを通って射場から出なければならぬ。しかしリトは男性恐怖症で自分に近づけない。これでは帰ることはできない。

タオルで左手を押さえたまま、和良は立ち上がった。そうして的場に向かってしばらく歩き、ここなら大丈夫だろうかというところで振り返った。

「ここなら邪魔にならないよね?」

確認のために尋ねると、リトがそれに満面の笑みで頷いた。

「できればもう二度と私の視界に入らないで下さい」

石化した和良はこの後まったく練習が捗らなかった。

年上の女・後編（後書き）

男性恐怖症で（男性に対してのみ）毒舌な野暮リトさん、今後出るかは不明。

あーんして

焼き肉三時間食べ放題の席で、グラスを持った真理奈が音頭を取るようになった。

「こほん。今日は横葉芸能専門女子学院の寮生六十七名で店を貸切にしたとはいえ、横女の生徒として恥ずかしいくないよう、備品を壊さないように楽しんでくれ！」

はい、と元気な女子生徒が高らかに返事をした。真理奈はそれに頷くとグラスを高々と持ち上げる。

無論、中身はジンジャーエールだが。アルコールは二十歳になつてからだ。

「それでは、乾杯！」

「かんぱーい！」

女子たちの高い声が店に木霊する。そんな中、座敷に座っていたものの六人のメンバーで和良だけが恥ずかしそうに隅に座っていた。

寮生の貸切ということで和良は当初遠慮したのだが、他の五人に同じ寮で生活しているじゃないかと丸め込まれ、最終的には真理奈と大志の実働部隊による強制連行によりここに至る。

じゅうじゅうと焼き肉の音が響く店内で、女子生徒の中にはやはりこちらに奇異の目を向ける生徒も少なくは無かった。

最初にネギタン塩を焼き始めた真理奈は一向にそれを気にせず、他の四人も金網の上で焼かれる肉に夢中だ。

「タイシは肉は何でも好きか？」

「タイシはんなら何でも食べそうやねえ」

二人の言葉に大志が失敬な、と目を吊り上げた。

「いくらオレでも生では食わねーよ！」

「いやそういう意味ではなく……」

困り果てる真理奈の前では既にタン塩が焼けていた。大志は先ほどまでのことは一切を忘れて箸で獲物を取りにかかる。負けじと咲

もそれに続く。

一方の美弥は一人黙々とサラダを食べていた。レタスやパプリカ、ブチトマト、ツナが盛り付けられ、それにコーンやドレッシングがかかっているだけの、普通のサラダだ。

和良はそれが少し気になった。

「ミイちゃんはお肉食べないの？」

「ミイはねー、贅肉付けたくないからヒレしか食べないのぉ」

贅沢な……、と一同は思うが、それで競争率が減るならば別に問題は無かった。

続けてロースを焼き始めた真理奈の前で紗和が頬を落とす。

「あてはロースが好きどす」

「柔らかいしおいしいしな！」

大志に激しく同意を示すように咲が頻りに頷く。和良もロースは好きだが、ちゃんと焼けているか不安で箸を出せない間に、ひよいひよいと三人の箸が焼けた肉を奪ってゆく。

三人が口々においておいしいと言っているのを悔しそうに和良が見ていると、真理奈が大志の伸ばした箸に先んじてロース肉を取った。その余りの早業に大志は愕然とする。

嬉しそうに真理奈はロースをタレに少し付けると、それを和良へと差し出す。

「カズくん、その——あーん、して？」

わざわざ体の向きまで変えて差し出してくる真理奈に、和良は不意打ちを喰らってドキリとした。

「あ、うん……ありがとう」

真理奈に出された箸を口に含むが、顔が熱くて何を食べているのかよく分からなかった。それでも真理奈に「おいしい？」と聞かれて和良は頷いた。

「ミイもカズおにいちゃんにあーんしてあげるっ！」

美弥が身を乗り出してほんのりと赤みが残っているロースを伸ばしてくる。和良はせっかく美弥が好意で取ってくれたので意を決し

て食べる。

「おいしい？」

「うん、おいしいよ」

赤みが残っている上に生っぽい味がしたが、それでもそう答えることが義務に思えた。

そうしてコースも食べ終わると、いよいよ真打ちであるカルビの登場だった。一同の目の色が明らかに変わった。

美弥までもが箸を持って準備しているので、大志がそれに否やを唱えた。

「おいミイ！ ヒレしか食わないんじゃないのかよ！」

「カルビは別腹だもん」

「卑怯」

「せやなあ」

三人が美弥を責めるのを見ていて、和良は改めて焼き肉の恐さを思い知った。普段は大人しい咲までもが非難しているのだ。

それに待ったをかけたのは真理奈だった。

「焼き肉奉行であるこの私が公明正大にこの場を判断しよう。カルビは全部で二十枚だ。しかしこの座敷には六人。一人三枚食べて二枚余るが、この二枚の所有権は『いせの』で決めようと思う」

「いせの？」

一同が首を傾げると、真理奈が和良に向かって拳を握った両手を出した。和良もそれを理解して同じく出す。

「いせので二！」

真理奈の掛け声で和良は右手の親指だけを立てていた。真理奈も右手の親指を一本同じく立てている。

「これで親指の数が二なので私は手を一つ下げる。先に両手を下げた人が勝ちだ」

一同はその説明を聞いて「あゝ」と納得した。

「せっさんかよ」

「ちゃんちゃんやねえ」

「指スマだよぉ」

「いっせのせ」

各々が記憶にある名称を言うが、面白いことにまったく一致しなかった。それに他の候補まで飛び出してくるのを、真理奈が遮った。取り合えず最初に真理奈が言い出した『いせので』に統一し、カルビの覇権を巡ってここに熾烈な戦いの火蓋が切って落とされる。

まず最初が一番隅の和良からになった。六人が二本ずつで最大数は十二だが、冷静に考えて大志はその性格上二本とも上げてくるだろう。自分は敢えて上げずに、その平均値である五から七で考えた時に七が妥当な気がした。

「いせので……七」

予想通り、大志は二本とも上げてきた。他は真理奈が一本、紗和が二本、咲と美弥はゼロ本だった。要するに失敗だ。

「次は私だな」

真理奈が不敵な笑みを浮かべるので、全員の背筋に冷たいものが走った。何となく、真理奈はこういうゲームに強いオーラが出ている。

瞑目して数秒してから、不意に口を開いた。

「いせので九！」

早口に釣られて和良と美弥が二本とも上げてしまう。大志も相変わらず二本上げているのでここまでで六本。そして依然として静かに構えている咲はゼロ本。真理奈が一本。全員が緊張の目で紗和を見ると、よほど驚いたのか紗和は両腕を上げて万歳の状態になっていた。

「サワ？」

全員が不審の目を向けると、紗和は恥ずかしそうに手を下ろした。「せやかて、あてビツクリしたさかい……」

そんな目で見ないでおくれやす、と顔を伏せる。その顔は真っ赤だった。

「とにかく、七本では失敗だ。次はタイシだな」

「おう！」

威勢よく答えた大志は両手を突き出すと、紗和も何とか戦線に復帰したのを確かめてから息を吸った。

「いせのでゼロー！」

全員が指も上げずに大志の方をまじまじと見つめていた。勝ち誇った笑みの大志はなぜか自分で指を二本立てていた。

「タイシ、このゲームのルールは理解してるよね？」

「おう、当たり前だろう」

和良に答える大志はそのままオッケーサインの右手を突き出してくるが、天然なのか狙ってなのか誰にもよく分からなかった。ただ一つ言えることは、大志がこのゲームで勝てる確立は皆無だろう。

激戦の末に一抜けしたのはやはり咲だった。冷静な予測と動じない心は弓道によって磨かれたのか、的確に数字を当てにきた。そして二番抜けしたのは当然の如く真理奈だった。兎に角勘が鋭かった。

「……っかよ、一回勝負じゃ不公平じゃね？」

カルビを焼き始めて数分とせずに、大志が文句を言い始めた。何となく全員が誰かしら言い出すとは思っていたが、大志が言い出したのはそんな空気があったのも理由の一つだった。

真理奈が重々しく頷いて思い悩む。さて、どうしたものか………。

カルビは実際に二十枚しか無いのだから、一人三枚食べて二枚残る事実は変えようが無い。ならば残った二枚を更に三等分してはどうかと思っただが、一枚が元々それほど大きくないので三等分したら本当に小さくなってしまふ。

真理奈が腕組みをして悩んでいるところに、別のテーブルに座っていた女子生徒が真理奈たちがいる座席の前まで歩いてきた。

「あの、こっこのテーブルでカルビが四枚余ったので良かったらどうぞ。私たち、もうお腹一杯ですし」

「いいのかい？ 確かにそれをもたらえると助かるが……」

「はい、それに横葉さんにはこないだのシャワーの件でも助けてもらいましたし」

「いや、それは——」

先日、女子生徒の一人が寮のシャワーがちよろつとしか出なくなつたと苦情が来て、業者を呼ぼうとした真理奈を和良が止めたのだ。簡単な故障だつたら部品を取り替えるだけで直るかもしれない、と言われて和良に任せると、果たしてストレーナーにゴミが詰まっているだけだつた。それを掃除しただけで元通りお湯が出るようになったのだが、意外と一般には知られておらず、誰でもできることなのだが業者を呼んでお金を取られることが多い。

和良は笑いながら首を振って、自分のことを言おうとした真理奈を制止した。自分にとって日曜大工なども当然の仕事だつたので、そこまで感謝される理由も特に無かつたからだ。

「——別にして、ありがたくカルビを頂戴するよ」

真理奈は皿を受け取ると、にこやかに笑う。

キヤー、とピンク色の声を発した女子が走り去って行つたが、真

理奈は不思議そうにその後ろ姿を見つめて首を傾げた。

「私は何か彼女を驚かせるようなことをしただろうか？」

「無自覚なんやねえ、マリはんは」

「どうでもいいけど早くカルビ食おーぜっ！」

「ミイも食べるー」

「おお、そうだな」

最後にレバーとホルモンが来て、それらも完食すると店員が最後のオーダーを取りに来た。めいめいがデザートを選び始める。

女子が一斉に思い煩う中、和良はありきたりにバニラアイスを選んだ。特に何も考えず、焼き肉の独特の油っぽさを消すにはこれが一番合っていると思ってた。

大志ならばデザートに冷麺を頼むかと全員が期待の目を向けていたが、意外にもライチシャーベットと女の子らしいチョイスをした。「あては白玉ぜんざいを。さっちは……」

言いかけて、止まった。咲は杏仁豆腐とヨーグルトの写真を真剣に見比べながら懊悩としている。

紗和はくすりと笑うと、店員に顔を向けた。

「さっきの白玉ぜんざいは止めて、ヨーグルトと杏仁豆腐をお願いします。——あて一人だと多いから半分こしよな、さっちは？」

「あ——」

咲がそれに気付いて、無表情に顔を逸らした。

「……ありがとう」

「あーん、さっちいカワイイわあ！」

我慢できなくなった紗和が咲を抱きしめる。咲はまたかと内心ではうんざりしているが、周りに他の女子生徒がいる為、あまり強く駄ができない。前回のようになく紗和のお尻を抓った。

「ひゃうん!？」

「落ち着いた？」

咲の質問に紗和が残念そうに頷く。もつと咲成分を吸収したかったが、これ以上やったら咲の機嫌を損ねそうなので我慢することにした。

そんな上級生の横で悩んでいた美弥は、メニューの隅から隅までパフェが無いかと探していた。勿論、焼き肉屋にそんなメニューがあるはずもない。

美弥は意を決して、裏メニュー的な可能性に賭けてみることにした。

「ミイはパフェで！」

「大変申し訳ありませんが当店ではパフェは作っておりません。ク

レープならございますが」

「じゃあそれで」

クレープならあるんかい！？ と全員が心の中でツツコミをして
いる間に美弥がさりげなくクレープを注文した。

最後に真理奈がチョコアイスを頼んだが、やはりそれより気にな
るのはクレープだった。なぜパフェは無いのにクレープならあるの
だろうか。逆にクレープを作る材料があるならパフェも作れそうだ
と思うのだが……。

「クレープはできてパフェができない理由とは何だと思う？」

真理奈が五人を見ながら呟いた。明確な答えは望むべくもないが、
せめてそれらしい答えが無ければ今夜は気になって眠れそうに無か
った。

最初におずおずと和良が手を挙げた。得意なことが料理という最
有力候補だ。

「クレープはツナやレタスを挟んで食事代わりに食べれるから店員
の賄いで出してるんじゃないかな。手軽に作れるし。パフェはやた
らと色々なお菓子やスイーツを使うから業務用で大きいとはいえ冷
蔵庫の幅を取るし、賄いでパフェを出されても嬉しい店員さんは少
なそうだからかな」

おおー、と全員が納得する。一見してそれっぽい回答に全員が拍
手をした。訳も分からず、周りの女子生徒まで何となく拍手を始め
る。このノリの良さは未だに謎だが、女子が集まればこれくらい
のことは起こるのだろうと、無理に自分を納得させた。

「でも実は違ってたりにしてな」

大志の何気ない一言で拍手がぴたりと止む。そう、実際のところ
は誰も正解を知らないのだ。

そうして悩んでいる間に、デザートをトレーに載せた店員が二人、
六人の座っている座敷へとやって来る。

「お待たせしました」

まずは和良にバナナアイス、真理奈にチョコアイス、大志にライ

チシャーベツトが配膳される。それぞれにスプーンを渡し、一人目の店員は下がった。続けて二人目の店員が咲にヨーグルトを、紗和に杏仁豆腐を配った。

全員の好奇心が最後の美弥の皿に寄せられるが、そこには一見普通のクレープが載っていた。

「なあ、中は何が入ってんだろうな？」

大志の言葉に中身が気になった美弥は試しにクレープを開いてみる。

——中には生クリームと輪切りにされたバナナが数枚だけ入っていた。

「……何か寂しいクレープだな」

「マリはんの言う通りやねえ。もう少し何か入ってもええんちゃう？」

「うん……」

「ミイちゃん、ちょっといい？」

「え？」

美弥の意気消沈した姿を痛ましく思った和良は、美弥の皿を取るとそこへバナナアイスを少し盛り付け、バナナアイスの横にあったクラッカーを半分に割って載せる。

その意図を察した真理奈が、自分のチョコアイスも少し盛り付ける。

「オレのチシャーベツトも載せていいぜ！」

「ヨーグルト」

「あての杏仁豆腐は合わないやろから、上のさくらんぼはどお？」
それぞれがクレープに盛り付け、いつしか中身がぎっしりと詰まったクレープが完成していた。

和良が丁寧に盛り付けたそれを再び巻き、皿を美弥に返す。美弥は皆の優しさで目が潤んでいた。

「みんな、ありがと……。ミイ、これ食べるのもったいないよ」

「気にすることは無いさ。食事はみんなで仲良く食べた方がいいし

いからな」

真理奈の言葉に全員が頷く。美弥がそれに頷いてクレープを食べると、満面に笑みが零れる。

「おいしい？」

「うん！」

（その後）

「カズおにいちゃん、あーんして？」

「あ、ズルイで！　うちも、カズくんにあーんするうー！」

「オレは別によそんなんには興味ねーけど、ちよっと多いから食わせてやらねえこともねえぞ」

「ヨーグルト」

「あてもお」

ぐいぐいと五つのスプーンが口に押し付けられ和良は顔がもみくちゃにされる。

「ごめ、いた、やめ、もお、無理……………」

ソファの上で魔される和良に毛布をかけた真理奈は、心配して昔母親に教わったおまじないを実践してみることにした。

「お休み」

おでこに軽く口付けをして、恥ずかしくなった真理奈はさっさと自分の部屋で眠ることにした。

あーんして（後書き）

いよいよ次のチャプターで二章【稽古始め】も終わりです。三章はGWと稽古の進展具合を描く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5134t/>

小田和良の花婿修行！

2011年6月5日23時28分発行